

いくやまかわ・・・

藤原 嗣治

白く輝くひと筋の川が、大地を二分して流れていた。透き通った風が足下から吹き上げてくる。

川の向こうには目白の台地が帯状のシルエットを見せて横たわっていた。さらにその向こう、うねりながら続く台地の先には上毛の山並みだろうか、山塊が立ちはだかるように連なっている。

目を戻すと鶴巻町から早稲田にかけて田園地帯が広がる。刈り取った稲を乾かすために植えられた榛はんの木が二列、整然と並んでいた。

牛込弁天町のこの丘に立つと若井牧太郎はいつも世の中が自分ひとりのためにあるようにおもえるのだった。

明治三十八年に牛込弁天町の丘の上に住んでいた田山花袋は、引越していまは代々木山谷に居をかまえている。友として親しんできた若山牧水も、道ならぬ恋の末に丘ひとつ隔てた牛込原町に引越していった。ふたりと入れかわるように、大通りを隔てた向かいの早稲田南町に夏目漱石が越してきた。

明治四十年、冬枯れのころ。二十歳になったばかりの若井牧太郎は、旅から戻って今日もまたお屋敷から近いこの丘に佇んでいた。かつてこのあたりは、牛の放牧場だったという。いくつもの小さな丘が連なりあって、終はてしない空のかなたへと続いていった。牛込の地名はそのころの名残だ。

この年九月、田山花袋は女弟子の岡田美知代をモデルした小説『蒲団』を『新小説』に発表。女弟子を郷里に帰した後、彼女が使っていた蒲団に埋もれ、残り香をかきながら泣くという、その当時としては考えられないようなストーリーが物議をかもしていた。

そのころ若山牧水は東海道から山陽道をめぐって九州宮崎に帰省していた。旅先から『新聲』八月号に送られた短歌のなかに

幾山河越え去り行かば寂しさの果てなむ國ぞ今日も旅ゆく

という一首があった。いま、この丘に立って口ずさんでみると、ひよつとしたら若山牧水は、旅に出るまえにこの丘で幾山河の構想を練っていたのではないだろうかと思えてくる。

(一)

雲をつくような絶壁の下を一艘の小舟が棹さしてゆく。

酔えばしばしばこの掛け軸を取り出して父は見入っていた。さすがにいまは牧太郎を横にはべらせるようなことはしなくなったが、幼いころはよく眺めさせられたものだ。

「おまえの体のなかには、この故郷の血が流れておる」

意味のわからぬまま牧太郎は、どうして血の流れのうえに舟が浮かんでいるのか不思議でならなかった。

雪舟作と伝えられるこの軸は、故郷を描いたものだと言い伝えられていた。若井家の家宝として先祖代々受け継がれてきた。

室町時代を生きた画僧の雪舟がどのような経緯で若井家のあつた備中の国を訪れたのかその理由はさだかではない。そんなことよりも誇りは、素人目には拙いとおもえる筆致で書かれた「雪」と、「舟」とも「州」とも読める落款だった。

雪舟は備中の国に生まれ、京で修行をつんだ。のちに大内氏の庇護をうけて周防の国に移り、石見の国でその生涯を閉じたと伝えられている。備中在住時代、幼少時から絵を好んだ。そのせいで経を読まなかった。せっかんされた。ひとり柱にしばられ、泣きぬれた涙で鼠を描いた。まるで生きていくようだった。そんな逸話がある。子どもものころから牧太郎も聞かされて育った。

四半世紀前まで若井家は、高梁川を遡った山間の小国、関家新見領のご家人としてなりわいをたてていた。

「痩せても枯れても若井の家は武士・・」と、耳が痛くなるほど聞かされて牧太郎は大きくなった。生まれは牛込弁天町だった。

明治四年に関家は廃藩置県で東京に出てきた。両親は新見生まれだったが、東京生まれの牧太郎には、武士がどんなものかぴんときなかつた。

牧太郎が暮らす牛込弁天町あたりでは、いまもときどき鬻など結った偏屈なじいさんが歩いているのに出会うことがあつたが、そのたびに、なんであんなへんてこりんな格好をしているのか理解できないでいた。

幼いときからお姫様として乳母おんうばひがき日傘で育てられた母にいたって

は、関家の家令を命じられた夫のもとに嫁いできたが、東京暮らしにはそれほど満足してはいなかつた。

「ご一新などと、もつともらしいことをいってはいけるけれど、いつ

たいどが変わったというのかしら。暮らし向きは一向によくなりはない。だいいち、武士を追い出した薩長の戦好きたちが天下をとったつもりでいい気になっているだけではないの。いつそ新見にいたほうが、どれほどよかったか・・・」

日清、日露のふたつの戦争をたて続けに経験した母は、新政府のやりかたには批判的だった。母の兄弟たちも戦争で命を落としていた。そのせいで、実家もその後四散し、いまは新見に寄る辺はなくなっている。それでもいまだに東京暮らしがなじまないうらしく、しきりに新見を懐かしむ。

家令といえはその家の主人につぐ総責任者。身分制度の厳しかった江戸時代なら、たかだか若井家のような小姓あがりの側用人そばようじんがなれる地位ではなかった。たまたま、ときの藩主の関長克公に気に入られていたというだけの理由で東京に連れてこられたにすぎない。たしかにたいした出世ではあったが、父親でさえ若井家の当主としてはかならずしも満足はしていない。わずかに残る武士の矜持がいまの地位にとどまらせていたにすぎない。

備中の国、関家新見領にいたころは、先祖代々、給人きゅうにんとして自分の領地をもらっていた。東京に出てからはそれもなくなり、明治新政府からもらう俸禄ほうろくと呼ばれる給金で生活しなければならなかった。つまり、地方公務員がいきなり国家公務員になったわけだ。

しかし、それもほんの数年で、明治九年には秩禄処分ちつろくしよぶんが決まり、公務員を「くび」になる。そこでいまふうにいえば退職一時金に相当する秩禄公債証書一枚が手渡された。

若井家がもらった秩禄公債証書の額面は千五百二十五円。これを政府に貸したかたちにしておけば、利子は年額九十一円とちよつと。これが一家の収入。

そのころ大工の手間賃が四十五銭。一年三百日働いたとしたら、百三十五円。つまり、若井家の年収は大工よりも少ないことになる。これでは暮らしは楽ではない。それどころか、苦しい。

しかも、この千五百二十五円は、三十年の分割払いでもらうわけだから、年ごとに利子は目減りし、最後はなくなるという手品のトリックのようなものだった。

いま若井家が務めている関の殿様は、明治十年に第九代当主の長克公が亡くなり、そのあとに公家の萬里小路家までのこうじから養子にはいった博直公だった。

先代の長克公のように無骨な男ではない。身長、五尺四寸（およそ一六四センチ）、それほど大柄でなかったが、色白でなよやかな立ち居振る舞いに、どこことなく品があった。こういうお方をお公家様というのだろうか。牧太郎にはまぶしかった。

明治十七年に子爵となり、二十三年七月から三十年七月まで貴族院議員を務めておられたが、報酬のないただの名誉職。暮らしの元手はやはり秩禄公債証書だった。これを銀行事業に投資して、なんとかご自分の生活は維持できていたが、証書の効力が消滅してからは利息がはいらなくなった。

そうなると関家独自に家令としての報酬を若井家に支払わなければならぬ。関家も大変だったろうが、若井家とても生活はさらに切迫するばかり。収入が下がったぶんだけ、家計をあずかる奥様の眉はつり上がる。

そんなわけで、いつも母のぐちを聞いて育った牧太郎には、若井の家督を継ぐ気など、もうとうなかつた。むしろ家令になるつもりはない。かといって、さしあたってやることはなにもなかつた。

だからといってぶらぶら遊んでいるわけにはいかない。さりとて勉強もそう好きではなかつたから、講義録だけを買って自宅学習をすれば大学を修了できるこうがいせい校外生として早稲田大学に席をおいた。いまでいう通信教育だ。

根が無精者だったから校外生になったはずなのに、家にいてもやることはない。講義録でも読んでいればいいものを、家のある牛込弁天町から早稲田大学まで近いせいもあり、しばしば暇にまかせて講義にもぐり込んだ。

お屋敷の前は谷になっている。その底を小川が流れていた。向かいの丘にも木立のあいだにお屋敷が点在している。そんななかでとくに目立つのが各宗派の寺院。江戸の町には寺院がおおい。大名屋敷があれば付属品のように寺がある。それも各宗派の寺がまるで陣取り合戦のように競いあって建っていた。

明治三十七年十一月、その日も牧太郎は朝から大学に顔をだすつもりで屋敷を出た。すると、表通りにさしかかったあたりで、荷物をいっぱいに積んだ一台の大八車が止まっているのが目にはいつた。

「おやおや、お引越すですか」

ずんぐりむっくりしたご主人らしい大男が振り向いた。丸い眼鏡がいかにも理知的な感じ。ふつうの人ではないな、とおもったが、そんなことに興味があつたわけではない。ただ、無類のお節介があたまをもたげただけ。

「そうなんだ。このあたりは坂がおおくてまいりましたよ」

風邪でもひいているのか、腰の手ぬぐいを抜き取り、男はブリブリと鼻をかんだ。なんとも間抜けな音。体も大きいから鼻の穴もよほど大きいのだろう。

「先の戦争で流行性腸胃熱にかかりましてねえ。それからというもの、どうも体調がよくないんですよ」

「軍人さんであられますか」

「おもわず言葉がうらがえってしまつた。」

「いやいや、そうじゃない。戦争を見に行ってきたんですよ」

「ふエツ、戦争は見物できるんですか？」

いきなり、蛇に呑まれた蛙のような声がでた。

「どうも私は口べたでいけませんねえ。もつとも、それだから物書きをしているようなものですがね。私設写真班の記者として日露戦争に従軍していたというべきでしたねえ」

「なくんだ、びっくりしましたよ。そうなんですか。じゃ、文士の先生ですか。それならわかります」

いいながら牧太郎は心のなかで手をたたいていた。

詩だの短歌だの小説だのが、そのころの若者のあいだには熱病のようにとりついていった。ここは取り入るチャンス。逃す手はない。文士の「ぶ」は、ぶらぶらうの「ぶ」ぐらいにしか考えていなかつた牧太郎には、この出会いはおもつきの幸이었다。

東京は坂がおおい。あくびをした猫の背のような丘がいくつも重なっている。ひとつ越えてもその先にまた丘がある。海っ縁にでるまでその繰り返しだった。

市ヶ谷薬王寺からやってきたというから、ふたつの丘を越えてきたことになる。坂をトロトロ下りかけたところで本通りから右に折れ、ふたたび坂を上ると牛込弁天町四十二番地。というわけで、最後の坂の下で休憩をとっていたようだ。

荷台には、たくさんの本が無造作に荒縄でくくられ、山と積まれていた。さすが文士の引っ越しらしいなと牧太郎はおもつた。

「どれどれ、私が押ししましょう。目的地はすぐその坂の上ですから。あと、ひと息ですよ」

すぐさま袴の裾をたくし上げて腰にはさみ、腕まくりをした。

「若い人は力がありますからねえ」

「ご主人の癖なのか、クンクン鼻をならしながら、立ちあがると、」

「さあ、もうすこしらしいですよ。いっきに行きましょう」

奥様にしては子どもっぽく、娘にしては年のあまりはなれていない若い女性がそばにびたりと寄りそっていた。

流行の桃割れを變形にしたような豊かな黒髪。切れ長の目の少し吊り上がった気の強そうな女性だった。

「さあ、もうすぐらしいから、頑張つてね」

やっばり娘なのだろうかとおもったが、いきなり、あなたはどなたですかと聞くわけにもいかない。牧太郎は大八車のうしろにまわると、右肩で荷をかつぎ上げるようにして押した。

坂を登りきると視界がいつきに開けてくる。左手のなだらかな斜面の下が牛込榎町。その先に続く田園地帯が鶴巻、早稲田、山吹町。立ちほだかる目白の台地の手前に流れるのが、のちに神田川と名をかえる江戸川。

振り向けばその反対側には市ヶ谷の台地がうねり、江戸城外堀をはさんで左手に招魂社しょうこんしゃの杜から皇居の杜、右手にこんもりと盛りあがった代々木の丘が緑なしていた。

大八車をとめると一行は、その場にへたりこんでひと息いれた。懐から取り出した新しい手ぬぐいで眼鏡を拭きながら、太りじしの主人が牧太郎を足元から見あげながら声をかけた。

「君は学生ですか」

「ハッ、まあ、ハイ」

根が正直だからおもわず、あいまいな返事をしてしまった。

「こんな時間にいるんじゃない、きみも不良書生ですな、それともいまはやりの文学青年ですかな」

いいながら両の耳のありかを確かめるようなしぐさで蔓つるをもつて眼鏡をかけなおす。

「ま、文学に興味はありますが、まだまだ、とぼぐちにも至っておりません。そんなことより、たまたまお見かけしてよかったですよ。昔このあたりには大八車の後押しを専門にしていた男たちがたむろしていたそうなんです。そのくらい坂のおおいところなんですから。

私の家は、ほれ、すぐそこ。斜向はすむかいにあるあのお屋敷がそんなんです。たまたま通りかかってよかったですよ」

「ほうほう。ということは、おぼっちゃんですねえ」

「いえいえ、そんなんじゃないやありません。ただの家令かれいの息子。しがな  
い召使いの子です」

いいながら、牧太郎はちらりと若い女性のほうを見やった。

眉間のあたりに利発さをにじませた女性は、聞こえているのかわい  
ないのか、つんとすまして立っていた。

「家令ねえ、私は最初にこの言葉を聞いたときには、てつきり魚だ  
と思いましてねえ。そういえば、フランスあたりでは高級料理に使  
われるそうですねえ、などと知ったかぶりをいって、おおいにひん  
しゆくをかったものです。」

ああそうそう、そういえば志賀直哉君、彼の家は相馬藩そうまはんの家令を務めていたそうですね。なんでも、その家令を務めていたおじいさんが足尾銅山の共同開発者だったというんで、鉱毒事件の見学に足尾に行くのを反対されてお父上ともめたそうですね」

「わが家はそんなじゃありません。備中の国の新見藩という、しがない田舎の殿様の家令ですからねえ」

「えッ！ 備中ウ？ すると関子爵の・・・」

「お殿様をご存じで」

「ええ、ええ、知っているどころではありませんよ。私は田山花袋といましてね、まだ売れない文士なので博文館で大日本地誌の編集をしておりますが、関子爵も博文館から『姉小路公知傳』あねこうじきんともでんという

本をおだしになっていて、帰り道になんどもご一緒したことがあります。奇遇ですねえ。このあたりだとはお聞きしていたんですが、まさか、お隣になるとはねえ」

急にそうこうをくずして田山花袋と名のつた文士の先生は微笑みかけてきた。

「そうなんですか。でも、私はこのお屋敷で生まれたものですから備中というところは知らないですよ。なんでも、母に聞くところによると、周囲を山に囲まれた、溪谷の美しい小洒落た町で、ずいぶん水のきれいなところらしいですよ」

家宝の雪舟の掛け軸を思い描きながら、いかにも見てきたように郷里を自慢をした。

「それは私もいちど行ってみたいものですねえ。そういえば美知代君、あなたのところも備中に近いんですから、やっぱり水がきれいで溪谷の美しいところなんでしょうねえ」

「ハイ、それはもちろんでございますわ」

行ったこともない備中の新見などというところより、自分のところのほうが美しいに決まってるでしょ、といわんばかりに牧太郎のほうを振り向いた。

きつと結んだオランダイチゴのような小さな口のはしがすこしピクツと動いたような気がした。武家社会の抜け殻をいまも捨てきれずに引きずっているような時代、いかにも負けん気の強そうなハイからな女性が男たちの気をひいていた。

「ええええ、ぜひ行ってみてくださいください。わたしのほうからお殿様によく話しておきましょう」

どぎまぎしながら牧太郎は、やっとそう応えた。これで文士の世界が転がり込んできた、はやる心をおさえるのに苦労した。



大八車に積まれていた本の山を見て、文士であることはすぐにはわかった。この人がいま売出し中の田山花袋であるとは、もちろん聞くまでわからなかった。

牛込弁天町四十二番地は、いくつも連なる丘のひとつで、そのなかではいっとう抜きん出て高かった。あたりにそれほど大きな木もなく、ぐるり三百六十度が見わたせた。これが花袋先生の自慢だったようで、なにかという文士仲間を連れてきて悦に入っていた。

そんなわけで、早稲田大学の授業にもぐり込むのもいいが、なんとなく田山家のほうがおもしろそうな気がした。引越しの手伝いをしたのを縁にして、牧太郎の田山家通いがはじまった。

かといって、それほど文士になりたかったわけではない。さしあたって自分がなにをしたらいいか、なにになりたいのか、牧太郎にはまだつかめていなかった。

たかだか一万八千石。その実、三分の一にも満たない六千石ほどの収高しゅうこうしかない新見藩あたりでは、秩禄公債額ちつろくこうさいもたかがしれている。たとえ華族に列せられ、貴族院議員に選ばれたからといって、どちらもただの名譽職で無報酬。貧乏華族もいところ。その家令だから行く末はおして知るべし。将来は決して開けているわけではない。

なんとか脱出の道はないかと思案しているとき、校外生こうがいせいという通信教育の制度があることを知って早稲田の学生になった。それでもものたりずに、通わなくていい大学にもぐり込むうちに、文士や歌詠みと知り合いになり、なんとなくつき合ってきた。

ところが、こんどはちがう。文士や歌詠みの卵ではない。れっきとした親鳥だ。そばにいればあわよくば餌がこぼれてくるかもしれない。そんな思いもすこしはあった。

それよりも牧太郎の興味をひいたのは、麴町土手三番町からときどき通ってくる女弟子の岡田美知代だった。新しい時代になったとはいえ、いまでも江戸時代の旧弊から抜けきれていない。色濃く身分制度が残る男尊女卑の強い時代、男に互して文士を目指そうかといういまふうの女性にも興味があった。

世間話や家人から聞いた話などを総合すると、岡田美知代はどうやら、かなり飛んでいる女性のようだ。

明治三十六年七月、神戸女学院三年生のとき、文芸誌の『新聲』編集部宛に内弟子志願の手紙を送りつけた。これだけなら、ただの文学少女だが、そんな生やさしいものではなかった。

続いて八月、夏休みで帰省していた郷里からこんどは博文館氣ついで、いかに自分がいま流行の悪書生ではないかを切々と綴り、かさねて内弟子志願の手紙を送る。

なんども手紙を受けとった田山花袋は、女が文学にたずさわることの難しさを説き、入門を断る。これで終わればただの熱に浮かされた文学少女だが、岡田美知代はそうではなかった。

この月の手紙のやりとりたるや、すさまじい。花袋の作品『女教師』を読んだ。やっぱり素晴らしい。先生のご意見には閉口したが、それでも入門したいおもいはかわらない。こんなに文学に対する情熱が強いんだから、なんとしても願いを聞いて欲しいと、連綿と手紙は続いた。

さすがに花袋先生、最後にはおれる。家庭の都合上、家におくことはできないので、女子大の寄宿舎か下宿に身をおきながら通ってくるのならやむを得ない、といったのが運のつき。

すかさず美知代は父親名義で、いかにも家族が応援してくれているとばかりに、上等の毛糸のシャツを花袋宛に送った。

これがまた花袋らしいのだが、はじめての弟子志願、それもうら若い女弟子などおもしろなかつたのだろう。しかもそのころ、美人で名高い樋口一葉という若い女文士と、ふたまわりちかく年の離れた師匠の半井桃水なからいとうすいとの関係が、やきもちも含めて評判になったことがまだ記憶に新しい。そんなわけで、まんざらでもない気持ちがそうさせたのだろう。誇りたい気持ちもあつたのかもしれない。とうとう岡田美知代を弟子にする。

明治三十七年一月十九日、田山花袋は美知代からプレゼントされた毛糸のシャツを着て信州小諸に島崎藤村を訪ね、

「君、ずいぶんしゃれたシャツを着ているじゃないか」

そう冷やかされ、おおいに連れていたそうだ。

それなら着て行かなければいいものを、自慢げに見せびらかすところが、いかにも人のいい花袋らしい。

なんだか田山家に通った。あるていど親しくなった。そのころあいをはかり、おもいきって牧太郎は先生にきいてみたことがある。

「先生、私は文士にむいていますでしょうか」

すると花袋先生は、眼鏡ごしにじろりとらみながら、「むきふむきというのは、君イ、書いてみないとわからないものです。美知代君をみなさい、とにかく書くんだと、いいえ、書けるんだと信じてすこしも疑っていないでしょう。ああじゃなくてはいけません。たとえ信じて書いても、物にならない人はいっぱいあるんです。でもねえ、これだけはいえますよ。なにをおいても書かない

と、いいか悪いかさえわからないですからね。これはもう自明の理。やるなら自信をもってやりなさい」

いっとき師についていたとはいえ、書店の小僧からほとんど自力でここまできた花袋先生ならではの言葉に、そういうものなのかと牧太郎はおもった。ようは、己を信じること。信じてその者になりきることからすべてがはじまる、ということか。

もつとも、このころの文士たちはというと、西洋の文学を言語で読み、それをヒントに書いた作品があたかもオリジナル作品のように迎えられる時代でもあった。ごたぶんにもれず花袋先生の書棚にもたくさんの洋書があった。

少々意地悪さもてつだって、花袋先生にしたのとおなじことを岡田美知代にも尋ねてみたことがある。

「私はどうでしょう、文士になれますかねえ」

フンと鼻であしらいながら美知代は眉間に皺をよせた。いつも揶揄するような牧太郎の視線が美知代はあまり好きではなかった。

「それは、君しだいです」

木で鼻をくくったような返事がかえってきた。

まったく冷たい女だ。こんな女はえてして、うらなりのような頼りない男を好きになったりする。

現にいまつきあっている男がそうらしい。花袋先生がしきりに心配している。なんでも、神戸で知り合いになった一歳年下の神学生らしいが、たまたまかけた情がいけなかったようで、すがりつくように後を追いかけてこようとしているという。

なんで美知代は、あんな男を好きなのだろう。いちど聞いてみたものだとおもいながら、その勇氣は牧太郎にはなかった。かわりに聞いたのが、彼女の郷里のことだった。

「そういえば、美知代さんの生まれは備後の国だそうですねえ。備後といえ、備中の隣だそうじゃありませんか。きっと、いいところなんでしょうねえ」

「そうかしら。私はあんな田舎で一生を終わりたいくないわ。風景が美しいとか、水がきれいだなんで、エトランゼのいうことよ。実際に生活してごらんさいよ、退屈で退屈で、もう死にそうですわ」

これでは花袋先生に「美しいところでしょう」ときかれて答えた、「それはもちろんでございませすわ」という言葉と牧太郎にいった言葉とはまるでちがうではないか。どちらが本心なのだろう。これだから女心はさっぱりわからない。

もつとも、自分だっておかれた環境に満足しているわけではないのだから、美知代が郷里に対して不満なのもわからなくはないような気がする。

「そうすると、あれですねえ。私もいちど備中の新見とやらいう町

に行ってみないといけませんねえ。そうしてからでない、うかつにいいところだなんていえませんね」

「そうですね。とかく人つて、頭のなかだけで物事を美化して満ち足りた気分酔いたがるものですものねえ」

「それはあなた、恋に似ていませんか？」

「失礼な。恋はそんないかげんなものではありません。もつと神聖でなければ・・・。あなたのいう恋はただの欲望ですわ」

「そんなものなんですかねえ」

「ええ、そうよ。あなたには恋がどんなものか、これっぽっちもわかっていないんですわ」

美知代の眉間のあたりが、だんだん険しくなってきた。牧太郎は、どこかで引かなければとおもいながら、なかなかそのタイミングをつかむことができず、おろおろしはじめていた。

「おい、美知代くん、ちよっときなさい」

書齋から花袋先生の声が聞こえてきた。

「あらいやだ、また先生のお説教かしら」

いいながら、美知代はあわてて走っていった。

ドタドタ音をたてて走るその後ろ姿には、良家のお嬢様の雰囲気などどこにもなかった。これが、新しい女なのかしら、と牧太郎はおもった。

このところ、美知代宛に男から手紙がくるたびに花袋先生は不機嫌になっていった。なんでも神戸で知り合ったのが縁で、一緒に京都見物をした神学生が、しつこく美知代につきまといて困るんだと、牧太郎にまでこぼしたことがある。その男からまた手紙でもきたのだろうか。

桜はもう散った。いまは葉桜が盛っていた。丘を吹きぬけてゆく風も日ごとに暖かみさを運んでくる。牛込弁天町四十二番地は丘の上だった。ひとあし遅れて咲く済松寺の枝垂れ桜が一望できる。その昔、春日局かすがのつぼねの姪で三代將軍家光公の信頼を得ていた祖心尼そしんにのた

めに建てられたというこの寺は、徳川家が逼塞ひっそくしたいまも権勢を誇っていたころの名残をとどめている。

済松寺に代表されるようにこの一帯には寺院がおおい。早稲田通りには、儒学者で兵学者でもあった山鹿流陣太鼓の祖、山鹿素行の眠る宗参寺、向かいに龍善寺、宗源寺がある。振り向けば馬の背の西斜面に南春寺、多聞院、数学者の関和孝の墓がある浄輪寺、それに千手院、久成寺、鳳林寺など大小の寺が軒を連ねていた。

道をはさんで谷側には町名にもなっている瓣天堂べんでんどうが鎮座してい

る。

「おーいッ！ 牧太郎くんはいるかい？」

花袋先生の呼ぶ声がきこえてきた。

すわ、なにごとか。まさか、ひそかに牧太郎が美知代に想いを寄せていることが知られたのではないだろうか。まさか、そんなことがあるはずがないとおもいながら、おそるおそる返事をした。

「美知代くんを麴町こうじまちまで送ってやつてくれんかね」

よほど興奮していたのか、ずれた眼鏡もそのままに、上目づかにじろりと見ながらいった。

「ハイ、かまいませんよ」

おもわず出かかった、喜んで、という言葉をぐいとのみ込んで牧太郎はこたえた。

花袋先生の後ろに、険悪な表情の美知代が立っていた。

「馬鹿をするんじゃないよッ」

いいながら先生は、ポンと美知代の背を押した。

無言のまま下駄をはくと、さようならもいわずに玄関を出ると、美知代はかけるように坂道を下っていった。

「先生、それじゃ、ひとつ走り行ってまいります」

あわてて下駄をつっかけると牧太郎は、ひとつ走りはないかとおもったが、はいた言葉はもうのみ込めない。急いで美知代のあとを追った。美知代はもう小さくなっていった。

「ちよつとオ、待ってくださいよオ。送って行けっといわれたんであって、ついて行けっといわれたわけじゃないんですからね、もうッ。ゆつくり歩いてくださいよ」

聞こえているのかいないのか、美知代はスピードをゆるめる気配はない。

「わたしはね、ぐずぐずしている男性はきらいなんです」

「ぐずぐずなんかしてませんよ」

「はつきりしない人はきらいなんです」

「どうしてわたしがはつきりしないといけないんですか？」

「のろまはきらいですッ」

ふり返り、ふりかえりながら美知代は言葉をなげかける。

「なにをいつているんですか。あなたが速すぎるんですよ。転んだらどうするんです」

「馬鹿にしないでよ。転んだりするもんですか」

行き交う人たちが、ふたりを避けるように道の端によりながら通り過ぎてゆく。

「もうけっこうです。ほら、おうちはあの松の並木のところですか。先生におっしゃい。美知代さんはまっすぐ家に帰りましたって」

ふたつの坂を越え、江戸城外堀まできたところで急に立ち止まってふり返ると、美知代は野良犬でも追ひ払うかのように手を振った。たたらを踏みながら牧太郎は立ち止まった。

「ハイハイ、お嬢様、おおせのとおり・・・」

いいながらきびすを返した。

〈いけ好かない女〉

つぶやきながら足元に転がっていた石ころを、おもいつきり蹴飛ばした。

石は並木の松の根かたを跳びこえた。二度、三度、小さくはずんで掘りのなかに落ちた。石は波紋を残して沈んでいった。餌とまちがえたのか、大きな鯉がいつせいに集まってきた。

(三)

明治三十八年の五月、体調を崩したとかで岡田美知代は郷里に帰された。火が消えたように田山家は静まりかえっていた。

一説によると、体調を崩したというのは口実で、追いかけてきた神学生から引き離すために帰郷させたのではないかと噂されていた。口さがない人はこうもいう。

「あれはね、やきもち。ほかの男にとられたくないというんで遠ざけたんですよ。花袋先生もただの男なんだ」

げんきんなもので、原稿の催促を口実に入りびたっていた編集者たちも、ときおりしか顔を見せなくなった。

六月になると、岡田美知代が国へ帰ったことと関係があったのかどうか、花袋先生は牛込弁天町から二キロほど南に離れた牛込北山伏町に引越して行った。

入りびたるところがなくなった牧太郎は、穴八幡あなはちまんの森のなかにある早稲田大学に足しげく顔を出すようになった。屋敷から大学までは散歩にほどよい距離。ぶらぶら歩きにはちょうどよかった。

そのころ早稲田大学には、小説家で評論家で翻訳、劇作までやってのける坪内逍遙が教授でいた。美学の講師はヨーロッパ留学から帰ったばかりの島村抱月だった。

抱月たちが中心になって復活させた早稲田文学が隆盛を迎えていた。相馬御風、北原白秋、若山牧水、土岐善麿、佐藤緑葉、安成貞雄、綱島梁川、有本芳水、それに中退したが三木露風や竹久夢二などがいた。こうした人たちに会って話を聞くだけでも飽きることもなかった。

なかでも牧太郎が興味を抱いたのが竹久夢二だった。いつも黒づくめの洋服を着ていて、インバネスと呼ばれるそのころ流行のマン

トをはおって高下駄をはいていた。

もつとも、そのころは夢二ではなく茂次郎もじろうといい、みんなは「もじさん」と呼んでいた。そのたびに彼は反論した。

「ぼくは茂次郎もじろうという名が嫌いなんですよ。だから夢二さんと呼んでください。夢さんでもいいです」

夢二の名は、あこがれの画家、藤島武二から一字をもらってつけたものらしい。絵が好きで、いつも画帳を小脇にかかえてカラコロ高下駄の音を響かせながら歩いていった。

すでにこのころ夢二は早稲田大学を中途退学し、挿絵さしえ画家として『平民新聞』や『少年文庫』などの仕事をしていたが、あいかわらず早稲田周辺をうろうろしていた。ときに大学にも顔をだし、授業にもぐり込んでいた。

あの男は「もじさん」だと牧太郎に教えてくれたのは、三十九年の九月に牛込弁天町のお屋敷の斜向かいにある下宿屋、霞北館に越してきたばかりの若山牧水だった。

牧水との出会いもまた田山花袋とのようにいきなりだった。いつものように早稲田大学へ行こうとお屋敷をでてすぐ、田山花袋と出会ったのとおなじ大通りを渡ったところで、向かいの下宿屋からできた男とぶつかりそうになった。

「おっととつとつと！」

いいなが右によけようとしたら相手も右、左によけようとしたら相手も左に逃げる。まるで鏡のなかの自分を見ているようだった。唯一ちがうところは向こうは鼻の下にちよぼ髭をはやしていること。

右に左に、いつまでたってもらちがあかない。とうとう、ふたりはその場にしゃがみ込んでしまった。

「ひんがわりくッ」

馬のいななきのような妙な声。

「・・・」

「いやあ、かっこわるい。おもわず宮崎弁がでしまった」

きれいに刈り込んだ坊主頭をなでながら男は立ちあがった。

「ときどき大学で顔を見かけますが、君もこのあたりに下宿していたんですか」

「下宿じゃなくて、そこが家なんです」

ふり返りながらお屋敷を指さすと、こぼれ落ちそうなほど目ん玉をひんむいて、

「やいやア、射水君のように、いいところのお坊ちゃんなんですねぇ

君は・・・」

まじまじと牧太郎をのぞき込んだ。

「とんでもない、住まいはそうですが、ただの召使いの子ですよ」  
あわてて牧太郎は否定した。

「なにしろ越してきたばかりで、まだ方向感覚がつかめてなくって  
ねえ。大学へ行くんですが、どっちの方向なんですかねえ」

頭をかきながら、ちよぼ髭はいった。

「ああ、それならついてくるといいですよ、ぼくも行きませうから」  
袴の裾をはたきながら牧太郎は先にたつて歩きはじめた。

「ぼくはねッ、若山牧水といいます。宮崎出身で、本名は若山繁。  
みんなは北原白秋君のまねをして”若さん”と呼びますがね。あれ  
は彼が毎月二十五円も仕送りを受けていて若様のようだからかわ  
れていたものだから、それを人におしついただけ。ぼくは九州の田  
舎者だから、やっぱり”ぼくさん”ですよ」

小走りでおいつきながら自己紹介をした。

「ぼくは若井牧太郎といいます」

「それじゃあ”まきさん”ですなえ」

「ええ、そういえばそうですねえ」

「そうですね、これからは”まきさん”と呼びましょう。”ぼくさ  
ん”と”まきさん”。いいじゃないですか」

かつてに決めてしまった。

気さくな男で、背格好も牧太郎と似ていたせいも、すぐに親しく  
なった。坊主頭でそのころ流行の鼻髭をたくわえていた。もつとも、  
鼻髭でもなかったら、子どもとまちがわれそうなくらいこじんまり  
としていて、あどけなさが感じられる男だった。若井家特有の侍言  
葉でいうと”お小姓”つてところか。

奇妙な出会いから数日後、二人は連れだつて鶴巻町を歩いていた。  
すると、いきなり牧水が牧太郎の腰をたたいた。なぜか、これが人  
に呼びかけるときの彼の癖だった。

「君も岡山の人だそうですが、あの男もそうなんですよ」

そういうながら指さした先にいたのが竹久夢二だった。

「なんでも邑久郡本庄村という草深い田舎の村の生まれだそうです  
が、父親が山師だったようで、こんなところでくすぶっているのは  
嫌だといって、造り酒屋の株やら田地畑などを売り払って九州八  
幡に越したそうなんです。だから九州の出身といっています、そ  
のじつ生まれは岡山なんですよ」

そのころの学生といえ、こくらばかま小倉袴にこんがすり紺緋の和服姿。ところが竹



久夢二はというと、いつも洋服にインバネスという黒いマントをはおり、それほど背が高くないのをかくすためか、朴<sup>ほおほ</sup>齒の高下駄をはいていつも背伸びをするようにして歩いていた。

「ほら、今日もまたやって来ましたよ」

当時、鶴巻町に一軒のしもた屋を改造した「つるや」という絵葉書屋があった。

金沢のほうから出てきた未亡人が一人、店番をしながら絵葉書を売っていた。瓜実顔に切れ長な大きな目。抜けるような白い肌。手をさしのべてやらないと手折れそうな感じの女性だった。

絵はがきを見るふりをしながら牧水が目でさし示した入口の向こうに黒いマント姿の男が立っていた。

若い男がふたり、なんだかコソコソと話しながら店内にいるのを目にして、はいるうかどうしようか迷っているようだ。

「なかなかはいって来ないのはね、たまきさんにラブしていることを、われわれに知られたくないからなんですよ。神経質な男ですからねえ。知られたら恋がダメになるとでもおもっているんでしょう。なにしろ、色が浅黒くて背が低いことにコンプレックスを抱いていますからねエ」

牧水は齒に衣を着せぬ男だが、彼がいうとなぜか嫌味がない。

もつとも、牧水だって、背はそう高くはない。それに、女性に惚れっぽいのは「もじさん」とそう変わらなない。いまだって牧水は神戸で知り合ったという人妻を好きになっていて、しょっちゅう彼女の自慢話をしている。

ところが、惚れっぽさではどちらもひけをとらなかつたが、好みはまるで正反対だった。竹久夢二こと「もじさん」は、一貫して瓜実顔で色白、すこし垂れ眉の目の大きな弱々しそうな女性、一方の牧水はというと、田山花袋の女弟子の岡田美知代のような気の強そうな女性を好んだ。

そんなわけで、牧水が牛込弁天町の霞北館に越して来たのは、花袋先生が引越したことを知らなかつたからではないかと、ときどき牧太郎にはそうおもえることがある。

知りあつてすぐに牧水はこういった。

「そういえばこの近所に花袋先生が住んでいませんか？ 噂によると美人でハイカラな女弟子がいるそうですが・・・、きみは会ったことがあるんでしょ」

「ええ、それはもう、美人にはちがいないんですが、鼻っ柱の強い女性でしてねえ。ずいぶんお守りをさせられましたよ」

「ましたよって、いまはいないということですか？」

「そうなんです。花袋先生は代々木に家を建てて、いまはそっちに移ってしまいましたからねえ」

「・・・」

大きな目玉をいっそう大きく見開いたまま牧水は固まってしまった

女好きというところの文学や演劇などを志している人たちときたら、めっぽう女性には惚れっぽかった。

有名なのは与謝野鉄幹で、二人目の妻がいながら三人目を手なづけているとかで世間を騒がせていた。牧太郎たちの先生である島村抱月からして愛妻の一字の「月」をもらって抱月と名のりながら、主宰劇団の女優とわりない仲になっていた。

抱月先生といったら、髪は七三に分け、細めの鼻髭をたくわえていて、いまならさしずめ銀行員のような生真面目な風貌であった。まったく人は見かけによらないものだ。

それはさておき、店の入口でうろろろして、なかなか夢二ははいってこない。しびれをきらした牧水は、いかにもいま気がついたかのように大仰に手をふりながら声をかけた。

「おお、もじさん、もじさんじゃないか」

「もじさんはよしてくださいと、なんどもいつているじゃないですか。ひどいなア、牧水さんは」

小脇に風呂敷包みを大切そうに抱えた竹久夢二は、ぶつぶついいながら店のなかにはいつてきた。

「なんだい、それは」

風呂敷包みを指さして牧水が聞いた。

「なんでもありませんよ」

そのままにしていればいいものを、夢二はあわてて背中に隠した。「いや、あやしい。なんでもなければどうして隠すんだよ」

「本人がなんでもないといってるんだから、なんでもありませんよ」

「本人がいつてるから、あやしいんじゃないか」

「もう、牧水さん。こらえてつかうさいよ」

おもわず岡山の言葉がでてしまった。

それだけでなく黒っぽい顔がますます黒ずんで見えた。ひたいに浮き出た三本の横じわがだんだん深くなってくる。

「牧水さん、行きましようよ」

いたたまれなくなつた牧太郎は、若山牧水の袖を引いた。

「ああ、そうそう。この男はねえ、牛込弁天町のぼくの下宿屋の隣の関子爵の家の家令の息子で、エーと、なんといいましかねえ名前」

「はい、若井牧太郎といいます」

「この男の郷里も岡山なんですよ、もじさんとおなじ」

「やめてくださいといったでしょう、その、もじさんは。夢二でも

夢さんでもいいですから、ちゃんと呼んでくださいよ」

牧水の耳に口をつけるようにしながら竹久夢二はささやいた。

当時、夢二は絵はがき屋のたまきさんに一目惚れをし、自分で書いた絵はがきをもってきては、しきりに気をひこうとしていた。

「さ、これをお売りなさい。謝礼なんかどうでもいいですから、足りなくなったらいつでもください、いくらでも描いてきます」

とでもいったかどうか、いずれにしてもその努力たるや、はたで見えていても涙ぐましいくらいだった。

そのころ夢二が盛んに描いていたのが、日本にはじめてワインドアップ投法をアメリカからもちこんだ早稲田大学野球部のエース

河野安通こうのあつし志だった。

牧太郎も河野投手の登板する試合を見に行ったことがある。グローブをはめた手を大きく頭上に振りあげ、背伸びをするように伸びあがってから投げる姿にほればれとしたものだ。

夢二は、絵はがきにはもちろん、挿絵さしえにもそんな河野のピッチング姿をたくさん描いた。

#### (四)

「ところでねえ牧太郎くん、君はいつたいなにをやりたいんだね。ぼくのような短歌ですか、それとも花袋先生のような自然主義文学ですか」

ある日、牧水にそう尋ねられた牧太郎は、とっさにこうこたえた。

「短歌でも俳句でも、散文詩でも小説でも、自己表現をするのにぼくは手段を選ばなくていいとおもっているんです。ようは、なにをいいたいかで、とる手法がおのずと決まってくるような気がします」

そのじつ、なにをやりたいという気があったわけではない。

そのころは、小説家いっぽんだったり、詩だけしか書かないという人はめずらしいくらいで、なんでも器用にこなしていた。たとえば、島崎藤村などがその代表だった。

したがって、牧太郎のような答え方をしても、だれも馬鹿にする者はいなかったし、笑われもしなかった。

「そうですか、有本芳水君のようですね。ぼくは不器用ですから、あんなふうにはできないんですよ。それに、こうみえてもけっこう、せっかちですからねえ。オール・オア・ナッシング、一か八か、伸るか反るか的心境なんです」

丘の上の草原に腰をおろして北の方角を見ながら牧水は、ひとりごとのようにいった。

眼下に田園地帯が広がっていた。その向こうに江戸川が流れている。目白の台地が立ちほだかるように横に長く連なっていた。

台地のなかほどには、ひととき偉容を誇るお屋敷が木々のなかにたたずんでいた。この建物こそ明治天皇をはじめ政財界の重鎮を招き、国政を動かす重要な会議が開かれた山縣有朋公の別邸・椿山莊やまがたありとも ちんざんそうであった。

「ぼくはね、文学にあこがれ、田山花袋先生を慕い、遠い九州宮崎の日向から延々と旅をして東京まで出てきました。にもかかわらず、夏休みのたびに十日も二十日もかけて郷里に帰るんですよ。なんのためなんでしょうかねえ。自分でもよくわかりません。たまたま郷里が日向にあったからだといえませんが、考えてみたら人の一生なんていうのは、偶然ではじまり偶然で終わるもの。まるで旅のようなものかもしれませんねえ」

若山牧水は田山花袋の信奉者だった。東京へ出てきたのは、ひとつには田山花袋のようになりたかったからだという。

牧水はいう。幸田露伴や尾崎紅葉などはもう過去の人。時代と時代のはざままで散った火花のようなものだ。

ツルゲーネフやゴーゴリー、モーツァルトなどの思想を日本に紹介したのは二葉亭四迷だという人がいるようだが、田山花袋だってひけをとらない。しかも花袋が二葉亭とちがうところは、書く作品がことごとく実であって、ただちにわれわれ人間に直結し、少々きざつぽくいうと人生そのものの声である。牧水は絶賛する。

「ちかごろ世間を騒がせている島崎藤村にしても国木田独歩にしても、自然派と呼ばれている人たちはすべて花袋先生の影響をうけて今日があると、ぼくはそうおもっていますよ。だからといって、ぼくには小説は書けませんから短歌をやるんです」

どうやら牧水は田山花袋のような自然主義の短歌をめざしているのだろうか。

「ぼくはね、歩きながらもものを考えるんです。部屋の中かで壁を見つめながらなんて、なにも浮かんでこないんですよ」

「牧水さんが旅をするのは、そういうことだったんですか。歌を詠むためだったんですねえ」

「ええ、それもあります」

「それも、というと？」

「酒ですよ、酒。うまい酒を飲みたいからです」  
若山牧水が飯を食うように日本酒を飲みはじめたのは、東京に出てきた明治三十七年、二十歳のころからだ。

日本酒は焼酎のように素っ気なくない。口にふくむとほろりと甘さが広がり、続いて絹糸のような繊細な酒精がおいかけて胃の腑に

流れ込む。この、次からつぎに糸をひきながら喉の奥に広がる芳香がいろいろのだという。

「いろいろなところを旅しながら郷里へ帰るのも、ひとつには新しい酒に出会う楽しみがあるからかもしれない。これがたまらなくてぼくは帰省をしているといってもいいくらいだよ」

遠い彼方の空を見やりながら牛込弁天町の丘の上で、牧水はとつとつと語った。

「君も旅を試してみたらどうですか、世界観が変わってきますよ」

さいわい君には、訪ねるべき里がある。まだ見たことがないのなら、ぜひそうしなさい。きつと、世界が広がり、これから、なにをやるにしても役に立つはずだという。

「たとえばですねえ。森に住んでいると木はたくさん見えますが、森は見えないんですよ。ぼくは東京に暮らしてみてもはじめて郷里をすばらしくおもえるようになってきました。旅をするのは、そういう発見ができるからでもあるんですよ」

冬の日あしは速い。西の空に陽が落ちると、またたくまに天から闇が襲いかかってくる。大蛇おろちのように横たわる目白の台地も空に溶け込み、その姿を消していった。

牧太郎と牧水は、下駄の音を響かせながら丘をくだって家路にいった。

(五)

わずか三年ほどで若山牧水はすっかり酒のとりこになったしまった。それほど大きくない牧水の身体のだこにはいつていくのかとおもわれるくらい酒は五体に染みこんでしまう。

「そういえば君の郷里は備中だったね。ぼくの先生は美作の人だが、おなじ岡山だろ。いちど会っておいたほうがいいな」

大学に行こうと誘いにいった霞北館の四畳半の部屋で、転がった一升瓶を足でかたづけながら牧水はいきなり牧太郎にいった。

「先生は悪い人じゃないんだが、とつきにくい人でね。でも、奥さんはいい人なんですよ。先生とちがってはきはき物をいう人で、気にいられると、ま、先生のお許しをもらうよりもたしかだからね、そのつもりで」

勢いよく部屋をでると牧水は、早稲田大学とは逆の江戸川方面に向かって歩きだした。

「牧水さん、ぼくさん。待ってくださいよオ、ぼくさん。もう少しゆっくりと歩いてくださいよッ」

小走りに牧太郎は後を追いかけた。

「君ねえ、まきさん。もう少し速く歩かないとだめですよ。旅をするときは一日に十里や十二里は歩くんですからね」

「いやあ、それにしても・・・。私は東京生まれなんですからね。旅なんかしたことがないんですからね」

いつか、花袋先生に頼まれて岡田美知代を送ったときのことを牧太郎はおもいだしていた。あときも追いかけるのがやっとなかった。

「だから、きたえてやっているんじゃないですか」

「ねッ、お願いですから、もう少しゆっくり・・・」

わずか一里ほどで牧太郎は息があがってしまった。

「ほれ、もうすぐです。この丘を越えて、見えるでしょう、緑の森が、あれが植物園です。あの向こうが先生の家なんですよ。さあ、がんばりなさい。もうすぐです」

いくつも丘を越えた。いくつも小川を渡った。草原を横切り、林を抜けた。ようやく帝国大学付属植物園のわきにたどりついた。

「さあ、あとはこの坂をのぼりきるだけだからね」

数歩先で立ち止まって牧水は牧太郎がのぼってくるのを待った。

牧水の背後の峠の向こうには、吸い込まれるような青い空が雑木林を切り裂くようにあった。ふと、この坂を越えたらその向こうは断崖絶壁になっているのではないかとおもった。勢い込んで駆け上がる足踏みはずして転落しそうな錯覚にとらわれた。

峠の上に立ってみると道は下ってまた丘に上る。東京は丘だらけだ。右はできたばかりの哲学館。のちの東洋大学。左に尾根伝いに少し西に行くと木立のなかに潇洒な屋敷が見えてきた。

「さあ、着いた。一緒に深呼吸をしよう。おちついて、緊張しなくていいからね、おちつくんですよ」

いいながら牧水は、つまさき立つようなかっこうで両手を天にかざした。牧太郎も真似て伸びをした。

門柱には達筆で尾上柴舟と書いた表札がかかげられていた。

牧水は慣れた手つきでぐり戸を開けた。すたすた奥へはいつていった。牧太郎はその陰にかくれるように後に続く。

「奥さくん、牧水ですよッ」

ご用聞きでもあるまいに、オクターブ高い声。

「牧水くくん。ちよつと待てね。いま開けるから」

女学校の音楽の先生のような声がなかから返ってきた。

ガタガタ、ゴトゴト、キュツキュと、いろんな音が聞こえてきた。

「先生のうちはね、いっぱい鍵をかけてあるんですよ。これじゃ泥棒にやる気をださせるだけですよ。いまをときめく仕立屋銀次の弟子のなかには”のび”なんて忍び込み専門家もいるというじゃないですか。ね、ごらんなさいな、ひとつひとつ開けるのだけで、いつも手まどるんですから」

二年前の明治三十八年夏、尾上家は泥棒にはいられた。紛失してはいけないからと研究のために整理中だった『八代集』の資料を手提げ金庫に入れておいた。しかもていねいに枕元において寝ていたからたまらない。つきりお宝だとおもった泥棒に持っていかれた。以来、鍵の数をふやした。

やがて引き戸が開けられた。なかから岡田美知代をひとまわり大きくしたような女性が顔をだした。

「あら、お連れ？」

「ハイ、ほら、挨拶ッ」

牧水は横にずれながら牧太郎の袖を引いて前に押しだした。

「若井牧太郎と申します。よろしくお願いいたします」

「あら、牧水君を染み抜きしたみたいな方」

「染み抜きはないでしょう」

牧水は日焼けした黒い顔をふくらませた。

「ごめんなさい。ほら、わたくし、根が正直だから」

「正直すぎます、それじゃあ」

牧水の声がひっくり返った。

「いいかげんにしなさい。虎に食われてしまいますよッ」

奥の間からかろやかな声が聞こえてきた。

「奥さんの名前はね、とらっていうんです。いつも先生はおんなじしやれをいうんですよ」

牧水がそつと耳うちをした。

「先生、上がりまゝす」

のぞき込むように奥に向かって声をかけると、牧水はさつきとあがつていった。取り残された牧太郎がぼう然と立ちつくしていると、

「ほらほら、早くあがりなさい。ここでは、あつかましくらいでないで相手にされませんよ」

奥さんは微笑みながら牧太郎を招き入れてくれた。

「まきさん、こつちこつち。先生、客人を連れてきました。この君は先生とおなじ郷里の男です。備中は新見だそうですよ」

無遠慮な男だ。

ふだんの牧水とはまるでちがう。下宿屋にいるときには、やれ胃が痛いのが気で足がうずくの、はては神経衰弱だとこぼしているくせに、別人のように生きいきとしていた。あつけにとられて牧太郎は見とれる。

「さあ、遠慮なんかありません。こつちへいらつしやい」

おそろおそろ部屋にはいると、和服姿で背筋をぴんと伸ばした先生が床を背に正座していた。細面に縁なし眼鏡がよく似合う凛とした人だった。

「君イ、新見だつてェ」

いきなり尋ねられた。

「ハイ、生まれたのは東京ですが、私の両親は新見で生まれたそうです。だから私の故郷は新見だと教えられて育ちました」

おもわず直立不動になってしまった。

「まあ坐りなさい。そうですか、私の義父は二十七年から三十四年まで足かけ八年、新見の裁判所にいたんですよ」

「それじゃ、奥さんも新見にいたことがあるんですか」

横から牧水が大きな目玉をこぼれそうにしながら口をはさんだ。

「いたことはないです。家内は義父が石見の浜田から新見へ転勤するときに京都の女学校に行きましたから、新見には一緒に行きませんでした。そうですよねえ」

居間に向かって問いながら先生は、

「私はこれから仕事ですからでかけますが、君たちはどうしますか」

「ぼくたちはきたばかりですから、先生、どうぞ。気にせず仕事に行ってください。いいかげんに引き上げますますから、どうぞ」

いいながら奥に向かって、

「奥さん、先生、おでかけですよ」

いいながら牧水は腰を浮かそうとする牧太郎を手で制した。

尾上柴舟先生はそのころ東京女子高等師範学校の教授をしていた。植物園わきの坂道を下ってとるところ上ったところに学校があったので、それほど早く家をでなくてもまにあう。そのことを知っていた牧水はわざわざ出勤時間をねらってきたようだ。

牧太郎を紹介するというのはどうやら口実で、じつは先生を追い出したあとにねらいがあった。柴舟先生はアルコールを召し上がらない。したがって、もらいものの酒がたまってくる。そのことを知っているものだから、こうして時期をみてときどき先生の家を訪問しているようだ。

「ハイ、君はこれが目的なんですよ」

柴舟先生を送りだした奥さんが、徳利をお盆にのせ、笑顔で部屋にはいつてきた。

「ハイ、ありがとうございます」

牧水はうれしそうにお盆をうけとると、牧太郎には目もくれず、さつさとかつてに飲みはじめた。

もつとも、牧太郎はそれほど酒が好きではない。どちらかというど甘党で、いまはやりのエンゼルマークのキャラメルなどには目がなかった。

明治三十二年に赤坂に創業された森永西洋菓子を代表するこの菓子には、三十八年から逆立ちした天使のマークが包装紙に描かれるようになった。通称、エンゼルキャラメル。古くから日本に伝わる水飴とはちがい、西洋の匂いと味がした。その秘密が牛の乳だと知



られるようになるのは大正時代になってからだだった。ほどよく硬く、四角に切っており、一個ずつ包装されていて清潔感があった。

「あなたはお酒を召し上がらないのなら、これでもお読みになったらいかが」

お盆と一緒にもってきた一冊の和綴じの本を奥さんは牧太郎に手渡してくれた。表紙には『縮柳わんりゅう 雑集』の文字が見えた。

縮柳とは、たわめて輪にした柳の枝を手に友を送る、中国の故事にちなんだ言葉だ。意味は一陽来復。牧太郎の暮らす関の家でも正月には奥様が床の間に飾る花にこの輪にした柳をいつも加えていた。

ページを繰ると漢詩や短歌や俳句がびっしりと閉じ込められている。奥さんの父親が備忘録的にこれまで歩んできた人生をまとめて自費出版したものだという。

「これを見ると新見のことがよくわかりますよ。ずいぶん歌が盛んなところのようですね。それに、槇の洞だとか羅生門だとか、ちよつと足をのばせば帝釈峽などがある景勝の地のようです。父は釣りが大好きでしたが、これも新見で覚えたようですよ」

奥さんの言葉が終わるかおわらないうちに、横からひよいと手がでてきた。酒を飲んでいるものとばかりおもっていた牧水だった。

「なんだ、そんなものがあるのなら、ぼくにも見せてください」

「これが早いか牧太郎の手から奪い取ると、本に目をとおしながら、酒はそっちのけ。牧水は本に夢中になった。」

明治四十年六月、早稲田大学の学年末試験が終わって夏休みにはいると、牧太郎はひまをもてあわすようになった。

斜向かいに住んでいた田山花袋も、三十九年には牛込北山伏町から代々木山谷に新居をかまえ、あわただしく越してしまった。

二十二日には、若山牧水も郷里に帰省するといって友人三人と連れだつて出かけた。絵はがき屋の未亡人、岸たまきを口説き落とし所帯をもった竹下夢二も、早稲田周辺から姿を消して久しい。それぞれにみな、未来に向かって歩んでいる。

ももんもと過ごすうちに七月はあつというまに終わった。八月にはいつてすぐ、ぶらりと出かけた神田で手にした『新聲』八月号に、「旅人」と題した若山牧水の作品十五首が載っていた。帰省の旅の途中で詠んだものにちがいない。

けふもまたこゝろの鉦かねをうち鳴らし

うち鳴らしつゝあくがれて行く  
海見ても雲あふぎてもあはれ吾が

思ひはかへる同じ樹蔭に

たゞ戀ひしうらみいかりは影も無し

暮れて旅籠の欄に倚るとき

幾山河越え去り行かば寂しさの

果てなむ國ぞ今日も旅ゆく

うつろなる胸にうつりていたづらに

また消えゆきし山河のかず

松の實と楓のはなと仁和寺の

夏なほわかし山ほとゝぎす

わが胸の奥にか香のかをるらむ

こゝろ静けし古城を見る

青海はにほひぬ宮の古はしら

丹なるが淡う影うつすとき（厳島にて）

寂寥や月無き夜をみちきたり

またひきてゆく大海の潮（日本海を見て）

峡縫ひて車は走る梅雨の日の

雲さはなれや吉備の山々

山静けし山のなかなる古寺の

古りし塔見し胸ほのに鳴る

桃柑子芭蕉の實賣る磯町の

露店の油煙青海にゆく

旅ゆけばひとみ瘦するかゆきずりの

女みながら美からぬは無し

安藝の國こえて長門にまたこえて

豊の國ゆき杜鵑聽く

酒飲めど飲めども酔はず思ふこと

あるとしてもなう灯と向ふ夜よ

―車前草社詠草―  
おおばこ

帰省する前に会った若山牧水からは、どんな経路で帰るか聞かなかった。例年の帰省では、新橋から神戸まで汽車で行き、神戸からは船で帰ると聞いていたが、この歌をみると船をつかわずに神戸から山陽路を経て下関から門司に渡ったとおもわれる。

「吉備の山々」「安藝の國」「豊の國」などの言葉にふれるうちに、牧太郎のなかに眠っていた痼りがふくらみはじめた。そのふくらみに突き動かされるように牧太郎の身体は反応した。

皇居を左手に見ながら堀端を駆ける。招魂社の杜を抜けて外堀へでた。市ヶ谷監獄に向かつてひたすら駆けていた。いくつも山坂をあえぎながら越え、牛込弁天町までたどり着いたときには、手にした一冊十五銭の『新聲』八月号は、汗でしとどに濡れていた。

そのまま屋敷に駆け込むと、大急ぎで旅支度をした。家人への挨拶もそこそこに、ふたたび新橋駅に向かつて駆けだした。

母の呼ぶ声が背後から聞こえた。

「これ、牧太郎殿、そのようにあわてて、どこへお行きなさる」  
さすがに武家の出。ふだんは山の手言葉をつかっていても、とっさのときには武家娘らしい言葉が口をついてでる。

手っ甲脚絆きゃはんは手に持った。当座の着替えも提げた。懐には、あり金いっさいと、買ったばかりの『新聲』一冊がはいっている。

「ぼくはしばらく旅に出ます。ご心配にはおよびません。おって手紙でお知らせいたしますので・・・」

母の耳に届いたかどうか。そんなことは気にしない。

ぼくさんに先を越されてしまった。尾上柴舟先生の家である本を横取りされてしまったときから、こうなることはわかっていた。

ともかくにも旅は始まった。行く先は山陽路。目指すは備中の国。目をつむれば臉に浮かぶ雪舟の掛け軸の世界。

## 第二章 汽笛一声新橋を

(一)

一六〇三年に徳川家康が江戸にできて最初に行ったのが日比谷入

り江の埋め立て事業だった。神田山、いまの駿河台を削り、その土で埋め立てては大名たちに屋敷地として与えていた。

新橋ステーションが建てられたあたりも埋め立て地で、かつて播磨龍野家が建っていたが、維新後、新政府に召し上げられて更地にされ、モダンな洋風建築の駅舎が建てられた。

広大なステーション前広場は、雨が降るとたちまちぬかるみに変じ、強い風が吹くとたちまち砂煙に包まれた。

海側には南風を避けるために浜御殿の森が利用されていたが、それでも西や東の強い風には効果がなかった。そんな不便さを解消するため、政府は明治四十二年の開業をめざして二〇〇メートルほど西側の烏森に新しい駅舎を建築中だった。

若井牧太郎がステーション前広場に駆け込んだ日は、数日来続いた通り雨のおかげでそば粉のような土にお湿りが与えられ、ほどよい固さになっていた。広場は物見客や出迎え人、それに牧太郎のような旅人でごったがえしていた。

行き交う人の数も姿も牛込弁天町や早稲田あたりとはおおちが。外国人居留地の築地に近いせいもあって西洋人の姿もおおい。日本人の服装も和洋入り乱れ、さながら人の博覧会のような。

紋付き羽織袴や洋服の紳士、股引に尻っぱしよりの旅人など様々だったが、いずれも決まったように男たちは帽子をかぶっていた。ハンチング、鳥打ち帽、山高帽と、こちらも様々だった。

女はたいてい和服だったが、なかには夜会服かと思まがうような洋服姿もちらほらいた。雄鶏のように尻を大きくふくらませ、鶏冠のような飾り物のついたつば広の帽子をかぶった大柄な外国婦人には、おもわず立ち止まって見とれてしまった。

赤、紫、緑、黄色と、外国の女性は原色を好むものらしいことを聞いてはいたが、実際に目にするのははじめてだった。まるで錦絵を見ているようだった。

「オツと、ごめんよ」

言葉が先か体が一回転するのが先か、ヨロヨロと牧太郎はよろめいた。あやうく転びそうになるのを右足一本で踏みとどまったとおもったら、

「どいたどいたア。おつちよちよオい」

吹き飛ばないようにハンチングをしっかりと押さえながら、尻っぱしよりの一団が追い越していった。

「にいさん、こつちこつち」

洋傘をステッキのように手にもった洋服姿のご婦人が手招きをしていた。

「だめじゃないの、あんな広場のまん中にボーっと立ってちやあ。ちよいと、懐をみてごらん」

いわれるままに手を突っ込んだ。巾着きんちやくも『新聲』も懐にあった。「ありますよ、ほらッ」

いって取りだそうとしたら、駆け足できたせいか、巾着の紐が背中  
中のほうにまわって帯のあいだにはさまり、なかなかでてこない。

「ホッホッホッホ！ こりやア傑作」

ご婦人は手袋をした手で口をおおいながら笑った。

なにがどうしてどうなったのか、なんで笑われるのか、牧太郎には  
かいもくわからなかった。

「なにがそんなにおかしいのですか」

「だって、おかしいからですよ。だらしなく巾着を懐に放り込んで  
いたおかげでなくさなくてすんだんですから」

「エッ、じゃ、いまのは掏摸すりだったんですか」

「そうですね、こんなに広いところで、どうして人にぶつかつたり  
するもんですか。でもね、ただぶつかつたんじゃないから、あ  
あして追われているふりをしたんですよ。ぶつかつた瞬間に巾着を  
抜き取って逃げるさんだったんですよ」

東京に掏摸がはびこりはじめたのは明治も二十年をすぎたころだ  
った。それまでの掏摸は一匹狼的だったのに対し、通称、巾着屋と  
呼ばれる親分が出現し、それと張り合うように清水の熊があらわれ  
ると、掏摸は二つの組に糾合されて集団化していった。

やがて巾着屋の跡目を湯島の吉、清水の熊の跡目を仕立屋の銀次  
が継ぐ。そこに日本橋の鼈べつこ甲屋の職人だった勝こと鼈べつこ甲勝が加わ

り、明治三十年代になると東京中、いたるところで掏摸が活動する  
ようになった。四十年はその最盛期だった。

牧太郎が懐中物をすられそうになったのは、掏摸用語でいう「違  
い」と呼ばれる手口だった。ふつうは人混みのなかですれ違いざま  
にすり盗るが、混んでいない場所などでは人に追いかけるよう  
なふりをして、ぶつかつた瞬間にすり盗る。

やりかたは少々荒っぽいのが、テクニクとしては一流でなければ  
できない仕事だった。

「まあ、不幸中のさいわいでしたねえ。これからは気をつけないと  
いけませんよ。なれなれしく近寄ってきた人を見たら、まず掏摸と  
思ったほうがいいですよ」

ご婦人のわきには大きな柳行李をかついだ相撲取りのような男が  
二人、早稲田の森の穴八幡あなはちまんの仁王様のようにつき従っていた。

「それじゃ、あなたもその一味・・・」

「まさか、ご冗談をおいいでないよ。もっとも、ハイさようで、な  
どと掏摸がいうものですか」

白い絹の手袋をした手の甲を口にあてながら、ホッホと上品に笑  
ったが、ずいぶん、はすっぱな物言いだった。

婦人の名は松旭斎天一龍とあって、いま売り出し中の女手妻師てづましだ  
と自己紹介をした。松旭斎といえは水芸が得意で、いまや知らない  
人はいないほど人気の手妻師の一派だった。

鹿鳴館時代を描いた錦絵のなかにでてくる婦人たちのように、胸  
元が大胆にあいたフリルつきの上着に前割れの二枚スカートがよく  
似合った。五尺（約一六〇センチ）そこそこ。年のころなら三十前  
後。そろそろ年増の色気がただよいはじめた妙齡な女性だった。

一瞬、牧太郎の頭のなかに、あの小生意気なオランダイチゴのよ  
うな唇をした岡田美知代の顔がうかんだ。そういえば彼女もときど  
き、はすっぱな物言いをしたが、どことなく不似合いだった。そこ  
にいくと天一龍さんの場合には板についていた。

「書生さんのようですが、これからどちらへ？」  
ただの物見客ではにとすぐにわかったのだろう。天一龍さんは旅  
なれたようすで駅舎に向かいながら尋ねた。

「ハイ、郷里へ帰省しようと思ひまして……」  
頭のすみに浮かんだ若山牧水の顔をうち捨てながら応えた。  
べつに牧水と張り合うつもりはなかったが。つい見栄をはって帰  
省と行ってしまった。

「故郷はどちら？」

「備中です」

「備中といえはどのあたり？」

「備前といえはご存じでエ」

「ええ、池田様のところでしょ」

「はい、その池田候の岡山から、さらに山奥にはいった新見とい  
うところですよ」

「あら、わたしたちは神戸まで行くんですよ。それじゃ途中まで一  
緒ですわねえ」

初旅の不安がこれでなくなる。そう思ったが、帰省といつたてま  
え、いかにも旅なれたふうをよそおいながら、牧太郎は後について  
いった。

「ところで、列車券はおもちですか？」

振り向いた天一龍さんのこぢんまりと整った唇が目にはいった。  
あわてて牧太郎は視線をそらした。

「いいえ、これからです。岡山までいくらかかるものか、これから尋ねようと思つていたところですよ」

帰省だといいながら、いくらかかるかわからないのは不自然ではないかと、いつてから牧太郎は気づいて、しまったと思つた。

「それはちょうどよかつた。私たちは二等車で行くんですが、一枚列車券の余りがあるので一緒しませんか。いえいえ、いいんですよ。どうせ余つているんですから。見たところ、どうやら書生さんのようですし」

「それではあんまり……。だいいち、私はあなたを知らないし、あなたも私を知らないでしょう」

「あらいやだ。たつたいま知りあつたじゃありませんか。まんざら知らないあいだからとは私は思つていませんことよ」

そういつてまた「ホッホッホッ」と笑つた。

天一龍さんの言葉が終わるかおわらないうちに仁王様のかたわれが列車券をひらひらさせながら鼻先に差し出した。

盛りあがつた肉のあいだに埋すもれそうな目に、鋭い光をたたえながら手わたされると、意志とは裏腹に牧太郎の手は伸びてしまつた。

行き先は神戸。そこから先は自分で買いなさいといつて手わたされた列車券は二枚あつた。一枚は青色の列車券。額面を見ると七円四十八銭。もう一枚は額面一円の急行券だつた。しめて八円四十八銭。そのころの腕のいい大工の手間賃が一日一円ほどだつたから、九日分をポンともらつたことになる。

「姐さん、わつちらア、ちよいと小荷物をあずけてめエりやす」

柳行李をかついで行こうとする穴八幡の仁王様に、

「姐さんじゃないだろ、師匠とお呼びッ！」

およの不釣り合いな天一龍さんの鋭い叱責の声。

「申し訳ございません」

あわてて柳行李をおろすと、真つ青な顔になつて仁王様たちはその場に平伏した。

「およしなさいな、こんなところで」

いつて牧太郎のほうに振り向きながら、

「あら、ごめんなさいイ。気のきかない弟子を連れてきてしまったものだから、ろくに口のききかたもできやアしない」

もとの、やさしそうな顔で天一龍さんは微笑みかけた。

いきなり牧太郎の背中に放り込まれた氷のかけらが、天一龍さんの笑顔でたちまち溶けて乾いていくのがわかつた。

南の風が二本の鉄路にそって吹き込んでくる。

風に運ばれた陸蒸気の煙が煉瓦造りの駅舎の壁にぶつかり、瀧のしぶきのように牧太郎たちのうえに降りそそいできた。

ツンと鼻を突く、生まれてはじめての匂い。甘酸っぱいような、いがらっぽいやいな不思議な味。いや、匂い。おもわず牧太郎はむせてしまった。

「あーら、陸蒸気ははじめてなの？」

手で煙を払い除けながら天一龍さんが牧太郎の顔をのぞき込んだ。

「ええ、子どものころに牛込の丘の上から煙りを吐きながら走る省線は見たことがあります、こんなに間近で、それも煙を吸うのははじめてなんです」

いってから牧太郎はあわてて口を手でおおった。

帰省ですといっておきなが、はじめてはないものだと気づいたが、口から飛びだしてしまった言葉はもうのみ込めない。

「師匠、ほれ、あそこ。先生じゃありませんか」

仁王様のひとことで話題がとぎれた。

ホッと牧太郎は胸をなでおろした。

指さした先には、フランネルの単衣にセルの羽織、足は紺足袋に靴。山高帽をかぶり、いま流行の人の字髭を鼻の下にたくわえた、四十がらみの紳士が洋傘を杖がわりに立っていた。

寄りそうのは細身の体に東コート、銀杏返しに結った髪もあでやかな年増女。三十七、八だろうか。半歩下がって立っていた。

牧太郎の失言などたちまち吹っ飛んでしまいそうな勢いで天一龍師匠は走りだした。その素早さに目をむいた。足の運びかたなどまるで蛇に追いかけられたときの野ねずみのようにだと思った。

牛込弁天町ではよくそんな光景を目にした。屋敷の前に小さな川が流れているが、その岸边に近いあたりに弁天堂があつて、いつもお供え物がそなえてあつた。これをねらつてやってくる野ねずみを待ち受けているのが青大将。そりそりと近づいて鎌首をもたげ、瞬きのまに襲いかかる。ところが、目を開けて見ると、ねずみはそれよりもさらに素速く走って逃げるのだった。

走り去る天一龍師匠の後ろ姿は、あのとときの野ねずみに似ていた。地を滑るように遠ざかった。

ふと気がつくと、二人の仁王様が牧太郎を両側からはさみこんでいた。

「師匠の先生といったらなにをしている人ですか？」



見あげながら訊くと、聞こえたのか聞こえなかったのか、仁王様たちは口をへの字に閉じたまま返事をしなかった。

プラットホームに立つ三人は、まるで赤の他人がたまたま行きあわせたかのように、てんでに三方をながめながらたずんでいた。

「おかしいなア、人ちがいだつたんでしょかねエ。それにしても、ちがっていたなんら戻ってきそうなものに……」

みなまでいい終わらないうちに牧太郎の右足に激痛がはしった。

あまりの痛さに声もでない。うつむいて見ると、仁王様の足が牧太郎の足の甲の上に載っかっていた。

「ピーフューッ！」

かわりに鋭い音が目をつんざいた。

白い煙が陸蒸気の車輪のあたりから噴きだす。三人の姿はまるで手妻でもつかったかのようにかき消された。

「もうしわけござんせん」

仁王様のかたわれが牧太郎の頭ごしに声をかけてきた。痛さのあまりしやがみ込もうとしたが身体は沈まなかった。それもそのはず、いつのまにか牧太郎の両脇のあいだには仁王様たちの太い腕が左右からさし込まれていた。

白い煙が消えた。天一龍師匠がこちらに向かったやってくる。先生と呼ばれていた男も、その連れの女も、かき消えていた。

「どいたどいたッ」

背後から叫び声が聞こえてきた。

サーベルをガチャガチャ鳴らしながら羅卒が駆けてくる。ステーション前広場のできごとを思いだしながら牧太郎は両の手で懐をおさえ、とつさにホームのはじめに退いた。

振り返ると、年のころ七十歳前後の紋付き羽織袴姿の老人が、軍服姿の一団に囲まれながらこちらに向かつてやっていく。身の丈五尺八寸（一七五センチ）はゆうにあるうか。頭ひとつ抜きんでていた。さすがに頭髪は少なくなっていたが鼻髭は豊かに白く光り輝いていた。

神妙な顔でたたずむ仁王様のあいだにはさまれながら牧太郎はその一団を見まもった。

軍服の一団のなかから湧き出すように姿をあらわした天一龍師匠がすばやく牧太郎に寄り添った。

「あの方が山縣閣下ですよ」

天一龍師匠が耳元でささやいた。

大きな鷲鼻が印象的だった。

そのころ山縣有朋は神奈川県の大磯に小洵庵、小田原に古稀庵、

京都に第一・第二・第三無鄰庵<sup>むりんあん</sup>、東京の小石川に新々亭などいくつもの別邸をかまえていた。

「大磯か……」

天一龍師匠がつぶやく声がきこえた。

そういえば牛込弁天町の丘の上から見やる目白の台地の森のなかにも山縣閣下の別邸椿山荘があった。

(三)

新橋く神戸間の鉄道が開通したのは明治二十二年七月だった。

当時、陸軍大将だった山縣有朋は、明治十六年の西南戦争で兵員や物資輸送網の必要性を痛感し、東西を結ぶ鉄道の必要性を政府に説いた。そのルートは艦砲射撃を避けるため中山道を候補にあげていたが、時間と経費がかかりすぎるといっているので東海道ルートを採用。明治二十年に着工、三年余の歳月を要して神戸まで六〇五・七キロメートルが全通した。一番列車が走ったのは明治二十二年七月。これまで新橋く横浜間、二十八・八七キロしか走った経験のなかった機関車をはたしていきその二十倍の距離を完走できるかどうかがあやぶまれた。

午後五時前、歓呼の聲に送られて新橋ステーションを出発した列車は、途中なんども機関車と運転手を交代しながら翌日、午後二時前に神戸ステーションに到着した。所要時間およそ二十時間。

江戸時代、江戸く大坂間を飛脚は六日で駆けた。忠臣蔵で知られる赤穂の侍が、江戸城松の廊下で起こった刃傷事件を赤穂の城代家老大石内蔵助に伝えた早駕籠は、乗り継いで四日と半日ほどかかったというから、鉄道の開通は革命的なできごとだった。

その後、朝鮮半島への玄関口となる下関まで延長されたのは五年後、日清戦争がはじまった明治二十七年のことだった。山縣有朋の念願はあしかけ八年の歳月をかけて実現した。東京く下関間およそ一二〇〇キロ。単純計算すると一日平均約四一〇メートル、時速十七メートルのスピードで線路が延びていったことになる。

山縣の野望は鉄道だけにとどまらなかった。徴兵制をしき軍備を増強した。日清・日露の戦争には自ら指揮をとろうと前線にも出かけていった。治安警察をつくり反対勢力をことごとくつぶしかかった。選挙制度にも手をつき込み、思うままに日本をコントロールしようとした。しかし、ひとつだけ失敗があった。時の変化を受け入れられなかったことだ。

選挙制度の改革でつまずいた。山縣有朋は政界から身を引いた。そして財界に身を潜め、官僚や軍部を後ろ盾に背後から権勢をふるうことになる。

当時の政財界人の多くがそうだったように、山縣有朋も例にもれず清濁併せ呑んでいたが、時の流れがいつしか濁りを洗い流し、清い部分だけが語り伝えられている。いつの時代でもそうなのだろうか。石川五右衛門のように、あるいは鼠小僧次郎吉のように、悪は時とともに影を薄め、やがて善が際だってヒーローが誕生する。

それはさておき、当時の牧太郎はこうした山縣の偉業を耳に蛸ができるくらい聞いて育った。その雲上人を目の当たりにし、おもわず身震いをした。

警護の者に囲まれた山縣有朋閣下の一団は見送り人をかき分けながら一等車のなかに消えていった。年間入場者数十万人を越える新橋ステーションでは入場者を制限するため、明治三十五年に入場券料金を二銭から五銭に値上げをしたが、それでも効果はなかった。定刻の午後三時三十分がちかづいていった。乗客のほとんどが乗り込み、見送り人たちが列車の窓にぶらさがるようにしながら別れを惜しんでいる。

牧太郎たちも穴八幡の仁王様の先導で汽車に乗り込んだ。東京く下関間の急行が運行されるようになってそれほどたっていないなかったが車内はほぼ満席。車両がいたまないように塗った油の匂いが鼻の穴を通して身体中にはいりこんできた。

すぐさま仁王様がなれた手つきで窓を開けた。ムツとするような暖かい風が吹き込んできた。潮の香りがした。おもわず酸欠の金魚のように窓に向かつて牧太郎は深呼吸をした。

横あいから天一龍師匠が笑顔でそのようすを見ていた。ふり返った牧太郎と目があう。あわててそらした。すかさず言葉が追いかけてきた。

「旅ははじめてのようね」

初めての旅を知られたくないために、みえで帰省ですといった牧太郎には返す言葉がなかった。

「あなたは窓際にすわりなさい。私は向かい。ふたりは通路側」  
天一龍師匠はてきぱきとすわる位置を決めた。

背当てに布をはった畳敷きの座席はすわり心地がよかった。

おなじ時間、おなじ列車のおなじ席に若山牧水もすわって旅だったのだろうか。いまどのあたりを旅しているのだろうか。もう、宮崎の実家だろうか。のんびりと縁側に寝ころんで昼寝でもしているのだろうか。好きな釣りに興じているのだろうか。それとも友と酒を酌み交わしてでもいるのだろうか。

そんな思いをかき消すような車窓のざわめき。目をやると見送り

の人にまじって陸蒸気見物の人びとでござったがえす群がふたつに割れた。続いて起こる悲鳴、怒声、靴音。いきなり目の前に人が放り出されるように転がった。追いかけてきた男たちが馬乗りになつてなぐりかかる。

「懐中の物を出せッ！」

馬乗りになつた男が叫ぶ。

「やめてくれ、人ちがいだア」

ふたつに割れた人の群が、たちまち男たちを包み込んだ。

「懐中時計だッ！ 時計はどこだ」

ねじあげられた男の手が人垣のあいだから見える。

「人ちがいだッ！ おいらじゃない。おいら、知らなねエ」

必死で叫ぶ男の声が聞こえる。

ガタンと客車が音をたてた。振動が牧太郎たち一行の身体を揺らした。天一龍師匠の身体がわずかに牧太郎側に傾いた。少し遅れて白粉の香が漂ってきた。ホームの群衆を置き去りにして、汽車はゆつくりとスピードをあげていった。

### 第三章 播州龍野尾上家

(一)

山陽線龍野駅は田んぼのなかだった。

午前七時十七分、神戸駅で松旭齋天一龍一座と別れた新見藩閥家の家令の息子の若井牧太郎は、八時二十九分に姫路駅で下車すると、九時五十一分発の鈍行列車に乗り換え、三十分ほどで龍野駅に降り立った。

「牧水くん、あなた、夏休みに宮崎へ帰省するんでしょ。そしたら、こんど帰るときには、龍野の父をお訪ねなさい。このまえ持ち帰った『縮柳（ル・わんりゅう）雑集』を読んだでしょ。父も短歌をやるのよ。少し都会の刺激を与えてあげないと上達しないから、きみが顔を出してくれるときと喜ぶでしょから」

「いつか柴舟先生のお宅を訪ねたとき、奥様がそう話していたのを思い出した。」

『新聲』八月号の「旅人」と題した若山牧水の作品を読んだだけでは、新見に立ち寄ったかどうかわからなかった。

「吉備の山々」という語があるから岡山に立ち寄ったことはまちがいない。

吉備真備（ル・きびのまきび）が活躍した中世、その勢力の及ん

だ備前、備中、備後、つまり岡山県全域と広島県の一部までを吉備国と呼んでいたことは、耳学問ならぬ目学問で知っていた。

「牧太郎くん、あなたもそうよ。新見へ行くんなら、龍野の父を訪ねるのよ。あなた、まだ新見というところを知らないんでしょ。岡山から先、どう行ったらいいか訊くといいわ」

そういえば、牧太郎もそういわれたことがあった。

そこで柴舟先生の奥様のアドバイスにしたがうことにしたが、あわてて家を飛び出したので、奥様の父上の家が龍野のどの辺りにあるのか訊くひまがなかった。

しかし、柴舟先生の話の思い出すと、おおよその見当はついているもりだ。

「釣り好きな人でねえ。なんでも新見にいるときにはまり込んだようです。わたしも龍野へ行くたびに誘われましてねえ。鰻釣りなんか、夜っぴいて川原にへたっているんですから、たまったものじゃありません。このか細い体をどうして見つけるのか蚊が襲ってくるんですからねえ」

釣りが好きだということだから、いずれ揖保川に近いところだろう。出雲街道は川に沿ってある。街道を真っ直ぐに行けばなんとかなるだろう。

田んぼのなかの駅前広場には人力車や馬車がたむろしていた。尻っぱしよりの車夫たちが、われ先と客引きをする姿を呆然と眺めていると、ひとりの中年の男が背後から声をかけてきた。

「にいさん、どこから来たった？ 町へ行くんなら一緒に歩こうかい。なあに一里ほどだですぐに着きますで」

神戸に仕入れにでも行ったのだろうか、とりうち帽子をあみだにかぶり、背には大きな荷をせおっていた。

身の丈五尺（約一六五センチ）たらずのずんぐりむっくりした男だった。上から下に眺めたところ掏摸にはとても見えなかった。まして置き引きでもなさそう。だいいち、こんな荷をせおってとん走できるはずはない。

そう思いながら、まてよ、荷物は見せかけかもしれない。放り出せば駆けることができるではないかと思つたが、着流し姿では裾が足にからまって走れるはずもない。まさか着物を脱ぎ捨てたりはしないだろう。だったら自分のほうが早いと確信。よっぽど新橋駅前で掏摸に出会つたことが頭にこびりついているのだろう。

「それじゃお願いします」

男の後について行くことにした。

しばらく雨が降っていないのだろうか。歩きはじめたはいいものの、埃ぼくていけない。

午前十時半。太陽は頭のとっぺんを容赦なく焦がす。男のとりう

ち帽子をキザだと思ったが、なるほど、こんなときには気取つてなんかいるものではないと気がついた。

線路に沿って五〇〇メートルほど戻ると揖保川の土手に出た。川面を渡ってくる風が水苔の匂いを運んでくる。

水辺が近いせいか、からかうようにシオカラトンボが体のわきをかすめ飛んでいく。秋を待ちきれない赤トンボがスイスイと気持ちよさそうに飛び交っている。

土手に上がって左に曲がると正面の緑の丘の斜面に町並みが開けていた。

「にいさん、あれが龍野の町だよ。昔の人はばかなことを考えるもんで、鉄道が町に引かれると煙で汚れるというて反対するもんだから、おかげでわしらあ苦労する」

あみだにかぶったとりうち帽子を押し上げながら男は首に巻いていた手ぬぐいで額の汗をぬぐった。背中の荷物が窮屈そうだ。

「旅をするときの荷物は手にさげるより、ふたつに分けてこう紐で結んで肩にかけるほうが楽ですよ」

と、天一龍師匠から汽車のなかで教えられたとおり、荷物を振り分けにしておいたおかげで牧太郎の足の運びは軽やかだった。

「ところで、にいさんどこへ行きなる」

「龍野です」

「龍野はわかるう、こうして歩いとるんだから」

「尾上という裁判所の元判事さんの家を訪ねます」

「判事さんねえ、なら官舎だろかのう」

「なんでも転任した同僚の家を借りてお住まいになつていそうです。官舎なのかもしれませんねえ。詳しいことは訊いていないんですよ」

「そうかい、ま、いずれにしても裁判所の近くだろのう。わしに歩いて来ない。近くまで行くから」

くつきりと大八車の轍（ル・わだち）の跡を残した土手道は、両脇と真ん中に草が生い茂つていた。刈り取られたばかりの切り口から夏草の匂いが立ち上つていた。

龍野の町は遠かった。

(一一)

午後三時三十分、汽車が新橋駅を発車しようとしたとたん起こつた捕り物騒動。組み敷かれた男と目があつたときの薄笑いがいつまでも忘れられなかつた。

左手に東京湾と名をかえた海を見ながら、汽車は海面から三尺ほど高い堤防の上を走つていた。

文明開化だとかいいながら、大口開けて叫んでいるのは政府の役人たちだけで庶民は文明を拒み続けた。

鶏が卵を産まなくなるなどの、煙突から吐き出される火の粉で火事になるなど、はては先祖代々続いた土地を召し上げられるのは嫌だの、誕生したばかりの政府としてはいちゃもんとも思えるような反対の声があがった。

役人をやのやいのとせかすのは、イギリス留学で蒸気機関車を見て驚嘆した伊藤博文と、プチャーチン率いるロシアの使節団から模型の蒸気機関車をもらって感動した大隈重信、それに大量の軍人を戦場に輸送する必要性を感じていた山縣有朋たちだった。

というわけで、やむなく遠浅の海のなかに堤防を築くはめになったのだった。

川崎辺りでようやく陸に上がった汽車は、順調にひた走った。国府津（ル・こうづ）駅で機関車を連結した汽車は、一路、海辺を後にして箱根の山を左手にしながら静岡県御殿場へとあえぎながら登っていった。

小田原から熱海を通って三島へ通じる東海道線はその当時まだ丹那トンネルが開通していなかったの でなかった。

警護の者にたちを引き連れた山縣有朋閣下の一団が国府津駅で降り、車内の緊張感が融けてなごやかになったころ、向かい側に座っていた天一龍師匠の顔がなんとなく柔和になったような気がした。

午後七時二十一分、三島を過ぎて沼津を通過した辺りから、しだいに夕闇が迫ってきて、師匠の口数がましてきた。両の手には見たこともない金色の硬貨がひとつずつ、指の上を転がっていた。右手は右から左に、左手は左から右に。小指の辺りに硬貨がさしかかると、くるりと手のひらを返す。また返す。まるで生き物のように硬貨がかつてに転がっているように見えた。

「政府のお役人というのはよほど儲かるのね。山縣閣下なんか見てご覧なさい。京都に三つ、大磯にも小田原にも別荘をおもちなのよ。それはそうね、自分たちで法律を決めて、自分たちに金が転がり込むような仕組みをつくればいいんだものね」

伊藤博文は静岡県の興津（ル・おきつ）、神奈川県の大磯などに別荘をもっていたし、後藤象二郎、井上馨、松方正義、西園寺公望らも興津にもっていた。神奈川は東京からもっとも近い別荘地として人気があり、金沢海岸、葉山海岸などは、石を投げれば明治の元勳の別荘に当たるといわれるほどが林立していた。

金貨は相変わらず天一龍師匠の指の上を転がっている。

明治四年に新貨条例が公布され、それまで一両が四分、一分が四朱、一朱が二五〇文だった四進法が改められ、十進法が採用された。同時に新しく一円金貨、二十円金貨がつくられた。

いまの金に換算するとおよそ二十万円。それを二枚も手の上でもて遊ぶこの人は、いったいどんな暮らしをしている人なのだろう。牧太郎などいまだに手にしたことさえなかった。

「ご覧なさい、こんな時計があるからいけないのよ」

金貨転がしの手を休めると、どこから出したのか左手に金の懐中時計がぶらさげられていた。

「どうしたんですか、そんなもの。男が持つ物でしょ、懐中時計なんて」

ときどき父親が磨く関の殿様の金の懐中時計を見たことがあった。「おまえも偉い男になったらこんな物が持てるんだから、しっかり勉強しないといけないよ」

と、説教じみたことをいうのを訊かされて大きくなった。だから、懐中時計は男、それも偉い人が持つ物だと思っていた。

毎朝のように父親が磨いている革靴も、そのころは偉い男が履く物だと思っていた。いまもそう思っている。

下駄か雪駄か、草履か草鞋しか牧太郎は履いたことがない。

「さあ、もうお休み、坊や」

いいながら師匠は懐中時計を牧太郎の目の前にぶらさげ、ゆらりと振りはじめた。

とたんに上の睨が下がってきた。目を開けていられない。頭のなかに霞がかかってきて、いつしか眠りに落ちていった。

グウワツシヤン

ドッスン

ガッタン

ガラガラ

ゴロゴロ

ありったけの音がけたたましく鳴り響いて牧太郎は目を開けた。

穴八幡の仁王様が床に這いつくばっている。

眠っていた乗客がいつせいに立ち上がってこちらを見た。

「あらあら、なんでもないんですのよ、荷物を落としただけ」

大海原を飛ぶアホウドリのように、ゆったりと大きく両手を振りながら、天一龍師匠が落ち着いた声で乗客たちをなだめる。

「だめじゃないの、手妻の道具を落としちゃ、それだからあんたたちいつまでたっても一人前になれないのよ」

仁王様たちを叱りつける。

床に転がった仁王様の腹の下から、金や銀に輝く宝石や時計や髪飾りなどがはみ出していた。

妙な物を手妻に使うんだなと思いつながら牧太郎は目を閉じた。立ち上がった乗客たちも、なにごともしなかつたかのように座席に



身を沈め、ふたたび眠りはじめた。

外は真つ暗。名古屋か岐阜か大垣か、汽車はどの辺りまで進んでいるのだろうか。さすがに停車駅で乗り込んでくる客はいない。

どれほど眠ったのだろうか。薄目を開けて車窓を見ると、東の空がほんのり明るくなっていた。

いつのまに床に散らばった道具をかたずけたのだろうか、仁王様たちもときどき鼻を鳴らしながら眠っている。師匠は背筋をぴんと伸ばして、まるで起きているときのようにして目を閉じていた。

牧太郎はしだいに目がさえてきた。頭にかかっていた霞が晴れてくるにつれ、仁王様の腹の下からのぞいていた手妻道具が不自然に思えてきた。

たしかに松旭斎一座の売り物は、お姫様姿の芸人が扇の先端や刀の刃先から水を吹き出す芸だ。髪飾りもいれば宝石だっているのかもしれない。それにしたって光り物ばかり。手妻道具なら衣装だっではいっていなければいけない。刀や扇子だつて必要だ。

などと考えているうちに、ふたたび上の脛が下がってきて眠りに落ちていった。

ガタン

と汽車が止まった。

午前五時二十一分。京都駅。

頭のなかの霞が消えて牧太郎は目覚めた。

頭の隅に仁丹の粒のように光っていた丸い玉が、しだいにふくらんできて、

ハッ

と気づいた。

そういえば、故買屋（ル・こばいや）という言葉を知ったことがある。いったのは早稲田大学に潜り込んで偽学生を気取っている男だった。

東京で盗んだ品物を京都や大阪で売りさばけば足がつかないというので、掏摸や泥棒は盗品をまとめて京大阪に運ぶ役を使っているという。それも一見してそれとわかるような人物は使わない。

「わしは金がいるときは、ときどき帰省のついでに運び役をやつて汽車賃を稼いでいる」

たしか偽学生はそういった。

大量に売りさばくときは学生ではだめ。そこで大きな明荷（ルけに）を担いで巡業をする相撲取りを仕立てたり、役者のような芸人を仕立てたりするという。

仁王様のような大男をしたがえた女手妻師の一座。大きな明荷。ひよつとしたら？

牧太郎は、そつと脛を閉じた。神戸まではあと二時間足らず。目

は閉じたものの、頭はキンキンにさえてきた。

午前六時二十分、大阪着。次は神戸。

「学生さん、起きたでしょ」

師匠の優しい声。

「学生さん、気づいたわね」

鋭いひとこと。

顔は微笑んでいた。

震いつきたくなるような、年増女の顔がすぐそこにあった。

(三)

龍野の町は坂が多かった。

鶏籠山（ル・けいりゆうざん）の山麓に築かれた城を中心に開かれた町は、山裾に向かつて屋敷が並び、身分の低い者ほど平地に住むという不思議なところだった。

尾上柴舟先生の義父の家は、退官後に移り住んだ家だそうだから、そう町のなかにあるとは思われなかった。北に向かつて延びる出雲街道は城下のはずれ、平地を通っていた。

仕入れ荷物をせおった男と城下の入り口で別れ、とっつきに見つけた一軒の万屋（ル・よろずや）に飛び込んだ。

薄暗くやたらに広い三和土（ル・たたき）に商品棚が並び、その奥の上がり框（ル・かまち）に腰の曲がった老婆がふたり、齒のないう口をもごさせながら、なにやらしきりに食べていた。

丸い盆のなかにはお椀になにやらはいついて、木の匙（ル・さじ）が突っ込まれていた。

牧太郎の顔を見たたん。

コホンコホン

むせて粉を吹き出した。

これが母からよく訊いた、はったい粉とやらいうものだろうか。ふつうはお湯で練って食うが、ときには間に合わせのおやつに粉のまま食うときもあるらしい。麦を炒って粉にしたものなので香りがいい。これに砂糖でも加えようものならちよつとした茶請けになる。

「驚かせてごめんなさい」

コホンコホン

「この辺りに尾上という家はありませんでしょうか」

「コホン、ここ。コホンコホン、先に、コホン。先に行った角を、コホン」

これでは通じないと思ったのか、いきなり上半身を前に倒すと、その反動を利用して曲がった腰をひよいと上げると、ついてこいと

ばかりに先に立って歩きはじめた。

わざわざ歩いて案内するのは大変。申し訳ないなと思いつながら後について行くと、早いこと早いこと。土をなめそうに曲がった腰を右に左に振りながら、杖もつかずにトットコ先に行った。

ふたつ角を曲がって真っ直ぐ行った先の、武家屋敷のとぎれた辺りに建つ一軒を指さし、くるりと背を向けるとなにもいわずにスタスタ引き返してしまった。お礼をいうひまもない素早さ。

元は龍野藩主お抱えのくノ一の末裔かしらと思わず振り返って見てしまった。やっぱり腰は曲がったままだった。くの字よりもっと角度が大きかった。コホンコホンとまだむせていた。

アッ！

ふたりそろって声をあげた。

牛込弁天町で牧水さんと出会ったときのことを思い出した。あのときもやっぱり出会いがしらだった。丸刈り頭に真っ黒い顔。それが牧水さんの第一印象だった。

きれいに七三になでつけた黒い髪。顔の真ん中にちよこんと尖った鼻。縁なし眼鏡をかけ、富士額ならぬ富士唇を突きだして、

「失敬！」

ひと声かけ、数歩進んで立ち止まり、振り返った。

「きみはッ！」

ふたりそろってまた声をあげた。

「まきさん！」

「露風さん！」

今年の秋から早稲田大学でときどき顔を合わせ、尾上柴舟先生の主宰する車前草社（ル・おおぼこしや）で顔を見かけた三木露風くんだった。本名は三木操。

有本芳水さんに連れられて車前草社にやって来たのは明治三十八年の九月のことだった。

同人のなかではいちばん年下の十八歳。それでいて自分がいちばんうまいと信じていたからたまらない。発表順位が後だとか、採択歌数が少なかったりすると、ぶつぶつ不平をいって失笑をかった。よほど自信過剰だったのだろうか、そのわりに仲間からかわいがられ、たちまち車前草社の寵児（ル・ちようじ）になった。

有本芳水さんから同郷の後輩だと紹介されていたので、てっきり郷里は姫路市だと思っていた。

ちなみに有本芳水は兵庫県姫路市の造り酒屋で回船問屋の息子で、八人兄弟の七番目、四男として生まれている。露風と違って実家は裕福だった。

露風の生まれた三木家は龍野藩の藩士で、祖父の制（ル・すさむ）

は幕末、寺社奉行を勤め、明治時代には第九十四国立銀行の取締役、初代龍野町長まで勤めた人だった。

露風の父親の節次郎は制の二男で龍野裁判所の書記官だった。母親は鳥取藩士の娘で、かたといひ掘正家の養女として育てられた。養父は典獄（ル・てんごく）、いまでいう刑務所の職員。転勤が多かったので龍野から転任するときに、かたを円覚寺の住職のもとにあずけた。

ここで三木節次郎と出会い結婚。ところが、この結婚は長くは続かなかつた。原因は父の節次郎の放蕩（ル・ほうとう）にあつたといわれているが、男女のことゆえ正確なことはわからない。露風が幼稚園のときに二男の勉を連れて家を出ていった。

われ七つ因幡に去ぬのおん母を又かえり来る人と思ひし  
母こひし竹の花咲く山の日はうづら追ひたるふるさとの家

東京に出てきてすぐに露風が詠んだ歌だ。いずれも母への思いがこめられている。

母のかたは、養父の東京転任を追いかけるように自身も上京し、看護婦養成学校に通うが、のちに再婚して北海道に渡った。

母への思いの強い露風だったが、それでも郷里への思いのほうが勝っていたようで、しばしば龍野へ帰省していた。

牧太郎と会ったのはちょうどそのときだった。

「なんでまささんがこんなところへ？」

振り向いた露風は驚いた表情で牧太郎の顔を見た。

「きみもなんでこの家から出てきたんだよ」

たがいに疑問をぶつけ合った。

露風のいうには、尾上柴舟先生もしばしば奥様をともなつて龍野を訪れるという。いまはちようど夏休み、ひよつとしたら先生が帰省しているのではないかと訪ねたのだという。

そういえば東京に出て最初に露風が『新聲』に発表したこんな歌があつた。

師を待つと夏よそほひし故里の美しくし山と水をほこらむ

柴舟先生龍野に来らる、と聞き、て、という添え書きがあつたのを記憶している。

柴舟先生がしばしば養父ご夫妻を訪ねて来るせいもあり、龍野の町は短歌が盛んだつた。先生の帰省を、みんな、いまかいまかと待っていた。露風のこの歌もそんな気持ちを読んだものだった。

「先生、お客人ですよッ」

いま出たばかりの玄関の戸を開けると、露風は奥に向かつて大声で叫んだ。すると奥から、  
「なにイ！ 牧水くんが戻ってきたのかい」  
のどかな声が帰ってきた。

(四)

二泊して尾上家を後にした若山牧水は、柴舟先生の弟子が来たというので町の人たちが開いてくれた宴の酒をつい飲み過ぎて昼前に起き、

「しまったしまった」

と、手っ甲脚絆も草鞋も手に持ち、草履を引っかけると龍野駅に向かつて駆けだしたという。

その後を追いかけるように、

「岡山まで行って、駅前に初音という宿があるから今日はそこに泊まるんですよ。わたしの名前をだせばわかるから……」

と叫んだが、はたして通じたかどうか心配だから、きみが行って確かめてみてくれ。

そう尾上先生の養父から頼まれた若井牧太郎は、午前十一時四十六分発の広島行き汽車の間に合うように尾上家を出発した。

これに乗ると岡山駅には二時五分に着く。一本後の下関行きだと五時を過ぎる。牧水くんはこの汽車に乗ったのだそうだ。

尾上家では養父のまとめた『縮柳（ル・わんりゅう）雑集』を見ながら、牧水くんがたどったはずの行程を懇切丁寧に教えられた。それによると、岡山から津山線に乗って津山まで行き、そこで姉が留守を守っている尾上家に一泊、そこから徒歩で三十キロほど先の勝山に行けば娘の祖母の家があるのでそこへ泊まればいと教えたのだそうだ。娘とは柴舟先生の妻、とら子さんのことだ。

津山も勝山もどちらも城下町。歌を詠むにはこと欠かないはず。だからそうしなさいとっておいたという。

「ほら、これをご覧」

書棚から出してきたのは、いかづち會の詠草が載っている読売新聞の切り抜きと、『帝国文学』だった。

朝またき伯耆路ゆけは瘦馬のやせし額に秋かせそふく

丸印のつけられたこの歌は、新婚まもない尾上柴舟夫妻が、挨拶もかねた里帰りのときの歌のはずだという。

津山から奥様の母親の実家がある勝山を経、両親が勤めていた裁判所のある新見に里帰りをしたとき、出雲街道で詠んだのではない

だろうかというのが養父の見立てだ。

「これは津山で詠んだ歌だ。町の真ん中に鶴山城の石垣がそびえていてね、城はないんだが風情はある」  
「ってニヤリと笑った。洒落たつもりだ。」

城にお城がないとは不思議な話だが、徳川幕府を倒した明治新政府は、不満分子が立てこもって抵抗するかもしれないからと、廃城令を出して全国の城を壊してしまった。したがって鶴山城も岡山城も備中松山城も明治四十年のころには打ち壊されしまっていた。

養父は『帝国文学』を開くと朗々と詠みあげた。

たかむらは煙に鎖（ル・とじ）ちて水くろき城の内隍（ル・うちぼり）ゆふべ雨降る

名に残る大手の松は暮れゆけど夕日あかるし城の高垣

時もりの鼓（ル・つづみ）ひびきしすみ櫓（ル・やぐら）たゞ蔓草ぞあらそひのぼる

御車は空しく過ぎて御假屋（ル・おかりや）の畳のうへに草おひにけり

「うん、じゃあ牧水さんが津山で詠んだのはこれかもしれませんね」  
「そうって牧太郎は持参した『新聲』八月号を繰った。」

わが胸の奥にか香（ル・こう）のかをるらむこゝろ静けし古城を見る

「うんそうだ、そうにちがいない。津山駅に降り立つと、いきなり城の破壊された巨大な石垣群が目飛び込んできた。つい哀れさに誘われ、思わず胸のうちで手を合わせた。そんな歌だろうかねえ」  
「養父は嬉しそうにそういうと、ページを食い入るように読み始めた。」

峡（ル・かい）縫ひて車は走る梅雨の日の雲さはなれや吉備の山々

「ああ、これもそうだ。これは津山線の風景だ。」  
「峡（ル・かい）縫ひて」か、いいねえ。得てして人間というのは、とかく高みに立って世の中を見がちだからねえ。わたしが新見にいるときに詠んだ歌にこんなものがある」

見渡せば山てふ山は山姫のをりつくしたる錦なりけり  
夕日さす牛ふす山の下紅葉いまをさかりの花と見るかな」

二首目は新見裁判所から兼任で高梁裁判所へ行っていたときに牛伏山（ル・がぎゆうざん）へ登って詠んだものだという。

「うーん、この様子だと、津山線で津山へはいり、西へ西へと歩いて勝山を通り、新見から帝釈峡のある東城へ向かってるな。そこから広島へ出て宮島、山口を通って下関か」

さすがに若い者は元気だと養父はひとり、つぶやきながら読み終わった。

龍野駅を出た汽車は、赤松におおわれた小山をいくつも分けながら進んだ。

那波（ル・なば）（現・相生）、有年（ル・うね）、上郡（ル・かみごおり）、三石（ル・みついし）、和氣（ル・わけ）、万富（ル・まんとみ）、瀬戸（ル・せと）、西大寺（ル・さいだいじ）、岡山と九つの駅を数えた。

岡山駅も例にもれず町のはずれに設けられていた。目の前にそびえるはずの岡山城は跡形もなく消え、そこには学校が建てられていた。その東の緑の森は後樂園と名づけられ、公園になっていた。

駅前広場には食堂や旅籠屋などがぼつんぼつんと建っているだけ。かつての城下が素通しで見えた。

牧太郎は考えた。

汽車で旅をするということとは、こんなにも空しいものなのだろうか。行くところ行くとともに、心を虚ろにする荒涼たる空き地が大口を広げて待ち受けている。